
真剣で私に恋しなさい！ It's beautiful life

武御雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！ It's beautiful life

【Nコード】

N8492W

【作者名】

武御雷

【あらすじ】

2年F組に在籍する不知火社とはあることが切っ掛けで他者を信じられなくなった。

彼の事を心配する小学生の時から友人葵冬馬、井上準、榊原小雪や2年F組の生徒や風間ファミリー、社の所属する風紀委員と関わって、社はどう変わっていくのか。

原作より前の2009年1月、高校1年の冬から始まる物語。

プロローグ（前書き）

ここでは初投稿です

まずマジ恋のストーリーがきちんと把握できていないため
原作ブレイクの可能性大
そのところに留意した上でお読みください

プロローグ

「ゆき、また何かあったらおいで」

「うん、バイバイ社」

「こういうときは”またね”だよ」

「またね社」

少年は少女と別れて家への帰路へとつく

葵冬馬や井上準と知り合いそして最近知り合った榊原小雪

彼女は母親の虐待から逃げ出して、よく社たちと遊んでいる女の子だ
そんな仲間と遊んだり話をしたり楽しい毎日を送っていた

”この日までは”

「ただいま」

そう言っただけにはいるが返事がない

最近父は看護師がしてしまった医療ミスの責任を背負い病院を辞めたため

家にいてもおかしくは無いはずなのに返事が帰ってこない

おかしいと想いながら少年は家に入ると暴れるようなドタバタとい

う音が聞こえ

居間へと向かうとそこには妹が果物ナイフで刺されて倒れており

周囲に目を向けると母も同じ様に台所で倒れていた

ソファアの近くでは、兄が腕から血を流しながら父と取っ組み合っていた

「親父どうしてこんな事するんだ」

「俺のせいでお前たちに賠償責任や人殺しのレッテルが貼られるのは耐えられないんだ」

「だからって、どうしてこんな……」

「……………父さん？」

「社？」

「親父、社には手を出すな！」

社は何を言っているのかわからなかったが

今のこの光景は父が作り出したことはよくわかった

そして社を見つけた父は、兄をソファアに殴り飛ばすと社に向かって歩いていき

「社、父さんのために、家族のために死んでくれるか？」

父はそう言つて果物ナイフを社に向かつて降り下ろす

社は後ろに逃げたが左の額から頬までに8cm程の切り傷を作り
今度は社の腹部にナイフをたてる

声もでない、体も動かない、恐怖で前も見えない

そんな状況に陥つた社からナイフを引き抜くと腹部に焼けた鉄を押
し付けられたような激痛が走る

それを見た兄は「止めろ」と言つて飛びかかり、また父と取っ組み
合いをする

しかし、大人と中学生では大人の方が強いのは言つまでもなく

兄も数カ所を刺されて倒れそうになりながら父を思いつきり押すと
父は後ろに倒れ机の角で頭をぶつけ動くことはなくなった

それを確認すると

「社、痛いかな？」

「にい……さん？僕は……しぬ、のかな」

「死なせない、待つてろ社」

そう言つて兄は電話の受話器を取り119に電話すると

力なく倒れ、動かなくなる

それからいくらか時間がたち救急車と警察が駆け付ける

しかし、家に入った警察は家の中の光景に啞然とした

そして、一人の少年が生きているのを確認すると、病院に搬送して
いく

手術の結果、少年は助かり病室に搬入され面会謝絶の札まで掛けら
れて眠る

翌日、看護師は慌てて主治医の所に駆け込んだ

何故、駆け込んだかと言うと前日まで黒かった少年の髪の毛が真っ白になっていたからだ

苦労や悲しみで髪の毛の色素が抜け落ちた様な白

それは、医師ではどうすることもできない心の病気だったのかもしれない

そして警察が意識回復の知らせを聞いて少年の病室を訪れる

少年の話を聞いた警察は一家心中としてこの事件の幕を閉じる

そして、この事件は少年の心に大きな傷跡を残すこととなった

ブログ（後書き）

仕事の関係上不定期更新となりますが
よろしく願います

第1話（前書き）

本日航空学生の試験がありました
テスト勉強の合間に取った休憩の間に書いたので
色々誤字脱字が有るかもしれませんが
ご了承ください

第1話

1月初頭

風が肌寒く痛く感じる。

そんな中一人の少女がタイヤを引きずって走る。

「ハッ、ハッ、ハッ」

呼吸を調整しながら少女は走る。

河原の舗装がされていないところを走っているためタイヤが砂ぼこりを巻き上げる。

彼女の名前は川神一子、川神学園の1年C組に在籍する少女だ。

毎日怠らず自分に与えたノルマはきちんとクリアしている少女である

彼女が走っていると赤いロードレース用のタイヤをつけたマウンテンバイクが転がっているのが目にはいる

何か有ったのだろうかと思ひ近寄ると

近くに本を片手に持って黒いジャンパーを着てフードを深く被った青年が眠っていた

ジャンパーの下に川神学園の制服が見える

しかも青年の回りには猫が数匹丸くなって同じ様に眠っている

その内の二匹は青年の上に乗っかり眠っている

そんなことよりも川神一子はその青年の事を知っていた

何故なら二人は同じクラスに在籍しており席も結構近いからだ

そこで川神一子は「風邪を引くから帰って寝た方がいいよ」と言うおとしたが

大事なことが思い出せなかった

それは青年の名前だ

思い出そうにも思い出せない

何故なら青年の名前は入学式のときに聞いただけでその後9ヶ月も聞いかなかったからだ

教室でも外でも、いつも一人かS組の葵冬馬や井上準、榊原小雪の3人と居るため

名前を聞く機会すらなかった

そのため思い出そうにも思い出せないものである

そんな中一子は思い出そうとして「うーん」と唸っていると青年が目覚めました

「シュレディンガー…重い、フェーリス…リュックから降りろ、シルウエストリス…指を甘噛みするな、カトウス…お前も降りろ」

そう言う猫たちが降りたり噛むのを止めたりする

シュレディンガーは『シュレディンガーの猫』と呼ばれる実験で非人道的な実験を行ったため

まず猫にたいしてつける名前ではないが一応関係あると言うことで付け

フェーリス・シルウエストリス・カトウスとは猫の学名でありそれの一つづつを取って付けたのだが

名前の由来は、はっきり言ってわかりづらいだろう

しかし、それを見た一子は「すごい」と思いながら眺める

すると一匹の子猫が青年に近寄ってくるのを見ると青年は子猫の事を「おいでウィズ」と言いカバンの中から猫じゃらしを取り出すと子猫に先端を差し出し一緒に遊びだす

そんな姿を見た一子は「面白そう」と思い近寄っていくそれに気付いた青年はリュックを持つと立ち上がり子猫を抱き抱え自転車に向かって歩きだしそのまま立ち去ろうとするそれを見た一子は青年に話し掛ける。

「ちょっと待って」

S i d e i n 社

「ちょっと待って」

「……」

そんな一子の呼び掛けを無視して歩き続ける

「君、同じクラスの人だよね？」

「……」

「どつやって猫と話したの？」

「……」

「どつやって言うこと聞かせたの？」

「……」

無視をし続けているのに後を置いてくる少女に

（なんなんだこいつは…馴れ馴れしいやつだ）と内心で思いながら歩き続ける

どこまでも質問しながら付いてくるためいい加減どうにかしようと思いつきながら歩く

（こいつ…どこまで付いてくるつもりだ）

かれこれ20分歩き続けている

家とは反対かもしれないのにどこまでも物好きだと内心で毒づきいい加減疲れたため話し掛けることにする

「…おい、お前…いい加減に帰れ」

「しゃべった！？何で答えてくれなかったの？」

「……そんなことはどうでもいい、いい加減付いてくるな」

「いいじゃない、それより……」

「この先は川神院しかないぞ、ついてきても仕方ないだろ」

「あたしの家はあそこだから大丈夫」

「……そうか、だったらさっさと帰れ」

そう言っしてしつと追い払おうとするが今度は腕を捕まれる
そして、一子はズイツと顔を近づける

「君、同じクラスの人だよね？」

「僕は君を知らない、だから何度も言うが帰れ」

「じゃあ、名前教えて」

「何が”じゃあ”なんだかわからん」

「早く教えてよお!!」

「……子供か」

そう言っため息をつくコンビニの横を通りすぎそつになり立ち
止まり

自転車を止めると子猫をジャンパーの首のところから顔が出るよう
な状態で自分とジャンパーの間に入れると

コンビニの中に入り飲み物やその他日用雑貨を買い漁る
勿論新聞に入っていた割引券を有効活用して出費を抑える、これ鉄則
買い物をしている間に帰っているだろうと思いい外に出ると
何故か、まだそこに少女がいた
両方のこめかみを右手の親指と中指で抑え（何故まだそこに居る）
と思うと

頭痛がしてきそうな気分になる

そして自転車を押して歩き出すと、やっぱり付いてくる

「おい」

「なに？」

「え？」

「……無視しているヤツになにがしたいのか知らんが、寒かっただ
ろ」

そう言うと、買い物袋からホットの棚から飲もうと思いついたドリ
ンクを差し出す
すると少女は自分の顔とペットボトルを交互に見ると

「……いいの？」

「要らないなら、僕が飲む」

「じゃあ貰うね……ありがと、優しいね」

「勘違いするな、お前にやるのは気まぐれだ」

「それでも、ありがと

それはともかく、アタシの名前は川神一子、君の名前は？」

「……君もしつこいな」

「おゝしゝえゝてゝよぉ」

「わかったから、袖を引っ張るな……山田太郎だ」

「山田君だね、覚えたよ」

「……これでいいならさっさと帰れ、6時をまわった…日も暮れたし家族が心配するぞ」

「もうそんな時間！？早く帰らなきゃ！！」

また明日ね山田君」

そう言う川神一子はダッシュしてどんどん遠ざかると川神院の中に消える

そして（結局なにがしたかったんだ、あいつは）と思いながら寮に帰る。

その日は宿題を済ませてウィズと遊び食事を与え風呂と食事、歯磨きを終え

テレビを見ながら川神一子と名乗った少女は自分の事を本当に山田太郎だと思っているのではないかと

別れる前の会話の内容を思い返しながら、ふと考えるが

結局「まあ、関わることも無いだろうから、まあいいか」と言う結論に至ったため

一子が言っていた同じクラスと言うことを忘れて……………

布団を敷き、布団の中で本を読んでいるといつの間にか寝てしまう。

……………翌日の事など全く考えずに。

S i d e o u t 社

第1話（後書き）

ありがとうございました

次回は今週から来週の頭には公開できるようにいたします

第2話

翌日

「おはよう、やしろ」

「おはよう、ゆき……近くないか？」

目を覚ますと目の前に榊原小雪の顔が自分の目の前にあれば誰でも驚くだろ。

まあ、同じ寮だから起こしてくれるのはありがたいが、この起こし方はなんとも言えない

「ゆき、なんでここにいるんだ？」

「とーまと準がよんでこいって」

「今……何時？」

そう言っただけで目覚まし時計を手にとるとそろそろ寮を出なければならぬ時間だった
着替えようと起き上がり布団をたたみハンガーのかかっているクロ
ーゼットに向かおうとして……止まる

何故かと言うとゆきがさっきまで布団を敷いてあった場所にちょこんと座っていたからだ

「ゆき、何してる？」

「やしろの着替えをみてる」

「それはわかる……部屋から出ていけ」

「……けち」

今のは僕が悪いのか？

まあいいかと思いながらクローゼットに向かうが視線を感じ振り返ると

襖を少しだけ開けた状態でゆきが覗いていた

「……だから、覗くな、出ていけ即座に」

「ううゝ、やしろのばか」

そう言っ出ていってしまう

出ていけは言い過ぎてしまっただろうか？後で謝ろう

急いで制服に袖を通し昨晚買ったクリームパンとジャムパンを取るとジャンパーを羽織り

階段をかけ降りると玄関でゆきが待っていた

「さっきは言い過ぎた、ごめん」

「いいよ、やしろのお願いだから」

「お願いではないのだが……冬馬と準を待たせているから行くのか」

そう言ってゆきのてを引いて出ると二人の青年が立っていた
そして片方の青年が口を開く

「おせえぞ社」

「冬馬、待たせてすまない」

「構いませんが、社が寝坊とは珍しいですね」

「俺を無視するな！」

「昨晚遅くまで本を読んでしまつてね」

「そうですね、社らしいですね、ですが体には気を付けてください」

「ああ、わかつてる」

「……俺は要らない子」

「よしよし」

路肩でしゃがんでのの字を書いてる準をゆきが撫でる

勿論これは社が不機嫌なゆき相手によくやることであり、ゆきは気持ちいいため抵抗はしないが

今の準にとつては傷を抉る行為に等しかったが、社が「ゆき行こう」と言つと

ゆきはすぐにそっちに行つてしまったため準はすぐさま復活(?)して追いかけてくる

まあ登校中に準には冬馬と社が謝つてこの件は終了

あれ、朝起きてから謝つてばかりいる？

まあいつか、朝のホームルームまで時間が有る、今日も1日が始まつて

クラスという煩い空間に入るのははつきり言つと面倒だ
いつものクラスメイト、他愛のなく耳障りな話、周りはいつも僕を避ける

周りの色が真っ白に見えて何も興味のない僕にはどうでもいい事だが、いつも繰り返す現実だ

僕にとつての平穩はいつも通り、何もなく時間は過ぎていく……か

そう思い教室に向かう、……が神様とやらは僕にとつての平穩はくれないらしい。

一子 side in

教室に大和たちが来て話をしている。

次の金曜集会はどうしようかといった内容が主に出てい

何が食べたいものはあるかと言うキャンプの質問に寿司と言う意見が出たため

アタシも賛成してお寿司に決定

すると教室がざわつき教室の入り口に視線が集まるその場所にはいつも一人でいる山田君がいた、みんなが何で驚いたように山田君を見ているかと言うと

S組の三人組と話をしていたからだ

「お前、ホントにS組に来ないか？」

「僕は別にエリートじゃなくていいから」

「そうですか、では気が向いたらいつでも来てください
私もユキも、準も待っていますから」

「やしろ、まってるよ」

「はいはい」

そう言って手を振ると教室に入ってくる

あれ？今、やしろって言わなかった？山田君の名前って太郎じゃなかったわけ？

アタシの聞き間違えかな？

悩んでも仕方ない、そう思って山田君の席に行こうとして予鈴が鳴ったため席につくと大和達も教室に戻っていく
うん、後で聞こう

一子 side out

ホームルーム、はつきり言って無駄でしかないと思う時間だ
それが終わり本を読んでいると一人の女子が社の席に近づいて来ると

「ねえ山田君、山田君の本名って何て言うの？」

「……」

「ねえ聞いてる？」

「……」

「山田君？」

「……」

返事が返ってこなかったため一子は、社が読んでいる本と社の顔の
間に手を入れると上下に振る
それでやっと気がついたように一子の方に顔を向ける

「……本を返してもらえる？」

「ねえ山田君、……本名を教えて？」

「…………誰？」

「……え？」

「君とどこかで会ったわけ？」

「昨日の夜、アタシに飲み物を買ってくれたの覚えてないの」

「ああ、暗くてよく顔が見えなかった

確か……………すまん名前
を忘れた」

「アタシの名前は川神一子」

「それで川神一子、僕にいったい何の……………【キーンコーンカーン
コーン】チャイムだ席につけ」

「また後で来るから」

チャイムが鳴ると社は一子に席につくよう促す

一時間目が終わり、休憩時間になるとまた一子が社の席に来る

そしてそれを無視しても次の時間も名前を聞きに来る

そんなことを繰り返すうちに昼休みになる

やはりこの時間も聞きに来る

「ねえ、本名は何て言うの？」

「これから屋上で食事するからついてくるな」

「教えてくれたらついていけないし聞かないよ」

「……わかったよ食事しながらでいいか？」

そう言って断るのは無理だと諦めたようにして屋上に一子と一緒に上がる

そして屋上につくと昨晚購入した弁当箱を開けて食事する

「なんで僕の名前なんて聞きたいんだ？」

「友達だから」

「は？……友達？君と僕が？」

「うん」

「川神一子……君は何を言ってるんだ

僕は君にこの前確かに飲み物を買ったがそれだけで友達というのは無理がないか？

まず何故僕が友達なんだ、僕は誰にも興味はないし
かわり合いたいとも思わない
そんな僕が友達？」

「じゃあ、これから友達、だから名前を教えて」

「……………」

純真なままの瞳で自分を見る一子を見て社は妹のことを思い出すと
いつも自分の後をついてきていた妹に姿を重てしまい
おもむろに口を開く

「社だ」

「え」

「不知火 社だ」

「不知火君だね」

「これで満足か？」

「うん…【ぐうぐう】／／／」

「弁当足りなかったのか？」

「そうじゃなくて…【ぐうぐう】／／／」

「体は正直だな、僕のをやるから食べろ」

「でも……」

「腹減ってるんだろ、ただの偽善ださっさと食え」

「ありがとうー」

そう言うと、どんどん弁当箱の中身を食べていく

そんな姿を見て社は自分の作った料理を美味しいと言って食べていた妹を思い出す

もう会えないという悲しみもあつたが、何故か今まで他人として接してきた筈の人物と

一緒に食事をしている自分に

（もうあんな思いをするくらいなら他者と関係を作らないと決めていたのに、本当に何をしているんだ僕は）

と後悔をしていたが何故か今日の前で弁当を食べている少女
川神一子とは友達になってもいいのではないかという思いに
首を振る

そして何故かイライラとわ違う妙な気分になつたが悪い気分ではなかったため

川神一子との食事をして過ごした。

第3話（前書き）

パソコンが起動しなくなったため今回は
携帯で投稿です

指が疲れた……

実際読み返してみましたが微妙です

それは置いておいて………

本編をどうぞ。

第3話

1月11日

この日は5時過ぎに目が覚めた社は寮母の許可を得て厨房に立っていた。

油の跳ねる音と香ばしい匂いが厨房に漂うなか2つの弁当箱にどんどん出来上がった料理を並べていき

白米も通販で購入した土鍋で17分という短時間で炊きあげて弁当箱に詰めていく

厨房にフードを被った不審者が料理をしている図

……とてもシユールだ

45分で完成させると覚めるのを待ってから蓋を閉めようと思い共同区画に行き私物の音楽プレイヤーで音楽を聞くが

そのまま二度寝をしてしまう

時間は6時前、早い寮生はもう起きてくる頃合いだった

「やしろ、おはよう」

「なんかデジャヴ？」

妙に寝心地がいいと思った社が目を開けると

ユキが膝枕をしていた。

腕時計を見ると午前6時51分登校まで時間はまだある

「ユキの気配に気づけないとは不覚だ」などと思いながら起き上が

ると

テレビをつける

ユキは残念そうな顔をして、社の隣に座り占いを見ている女の子というものは占いが遺伝子レベルで好きらしい

まあ、どうでもいいんだけどね

そうこうしているうちに登校の時間になる

社は自転車の鍵を外すと押して歩きだしユキもそれに続く冬馬達と集合する場所に着くと数分後に冬馬と準が現れる

社は幼なじみのこの3人に対してのみ笑顔を極々希に見せるが

あの事件の後、ここ数年でかなり笑うようになったものの昔に比べ少なくなったのは言うまでもない

学校に着くとC組の教室の前で別れ自分のクラスに入る、いつも通りなにも変わらない

最近では、朝、学校に来ると必ず……

「おはよう不知火君」

ほら来た、最近何かとかまってくる少女

川神一子だ

毎日毎日よくもまあ飽きないものだ

無視しても話し掛けてくるし、逃げても何故か追ってくる

コイツは警察ですか……

どうでもいいけど

「朝からづるさい……………何」

「おはよう」

「お前は保護者か」

「おはよう」

「わかったよ、おはようさん…さつさとあっちに行け」

そう言つて追い払う

そして数分も経たないうちに担任が教室に入ってくると

ホームルームが始まり

出欠確認、通達事項、今日の予定

いつも通りだ

「最後に来週から3学期の中間試験だ、全員しっかり勉強しておくように」

赤点なんて取つたら小島先生の教育的指導が待っていると思えいいな」

そう言つて担任の教諭は退出していく

来週から試験か、かつたるいことこの上ない

めんどくさいが1日丸々潰れることだけが嬉しいことだ

どうせ勉強しなくてもある程度は点数も取れるから暇潰し程度でいいかな

そう思いながら机のうえに教材を出して本を読み始めると
川神一子がやってくる

「ねえねえ、勉強教えて」

「……」

「不知火君」

「………僕が？」

「うん」

「嫌だ」

「何で？」

「面倒くさい」

そう言ったら諦めると思っていたが諦めずに食いついてくる

「大和は間違えるとすぐ叩くし

岳人は馬鹿だし、モロはキレると怖いし
京は最近教えてくれないし」

「あつそ」

「不知火君、友達なのに冷たすぎる」

「そうだね、わかったらさっさと戻れ」

そう言うときチャイムが鳴り1時間目の授業が始まる

綾小路麻呂とか言う気色悪いと言われ教師が授業を進める

この一年通して思ったのが平安辺りしかやっていないと言うことだ
コイツ本当に教師として免許持ってるのかと疑いたくなる程同じところしかやらない

いい加減飽きてきたと思いながら教科書で隠すようにして読み始めると

いつの間にか授業は終わっていた
すると案の定川神一子がやってくる

「不知火君……」

「嫌だ」

「まだ何も言っていないのに」

「どうせ勉強教えて……でしょ」

「うん」

「他を当たってくれ」

「どうしても嫌？」

「どうしてもいいだろ」

そう言つて追いつ返そうとするが食いついてくる
次の授業が終わるとまたやって来て
また授業が始まり

終わるとまたやって来る

と言つた繰り返しで疲れてきた社は

「考えておいてやるから今度にしろ」

と言つて追いつ返すことに成功する

時は飛んで昼休み

屋上に社、冬馬、準、小雪の4人が集まり昼食を摂っていた

「ユキ、これがユキの分」

「わぁーい、やしろのお弁当」

「はしゃぐな」

「しかし、毎度思うのですが上手ですね」

「気合い入ってんな」

「これくらい普通だろ」

そう言つて社の隣に座る冬馬と向かいに座る準が弁当箱の中を覗いてくる

冬馬達だから、それは別に構わない、もし違ふ生徒だったら殴るかもしれない

なぜならどうでもいい相手だからだ

そんなことを考えていると、ふと今日一日中つけ回してきた川神一子の事を思い出し
ため息をつく

「はあ」

「社君、ため息をついていると幸せが逃げますよ」

「僕は別に幸せじゃなくていい、

午前中を思い返して疲れただけだ」

「何かあつたのですか？」

「べつに」

そう言つて会話を終わらせるその後は、ユキの新作紙芝居を見て冬馬とテストで出そうな問題の洗い出しや答えをどう求めるか確認し合い

準でユキと遊ぶ

いつも通りの仲間に自分を見失わずに済みそうだと
内心で思う

放課後

「不知火君」

「明日まで待て」

「テストに間に合わなくなっちゃうよ」

「そうか、それはよかったな」

「良くないよー！」

「今日は本を買いに行くからついてくるなよ」

そう言って帰ろうとするが

川神一子が袖を引っ張る……コイツ本当に子供かよ

「わかったよ、明日には出題傾向を確認しておくから」

「教えてくれるの？」

「明日からだ、しつこく来るから仕方なくだ勘違いするな」

「それでもありがとう、明日からよろしくね、不知火君」

僕は何でコイツの事を突き放す事ができないんだ？

面倒くさい事を引き受けてしまったものだ

そう思いながら駐輪場まで走って行き即座に帰路につこうとするが
そうは問屋が卸さないと言うのは世の常である。

第3話（後書き）

どうだったでしょうか

不定期更新ですがよろしくお願いいたします。

第4話（前書き）

やっと更新です

もう少し早く更新できるようにします

第4話

夕方

社は帰りの支度を済ませ雑誌を買いに書店へ向かうためリュックを背負いS組の教室の前を通ろうとする。

すると勢いよくS組教室の扉が開き派手な特注とおぼしき制服を着た生徒が出てくる

勿論周囲に気を配らない社とぶつかる、当然ある程度とは言え鍛えている社にぶつかった

九鬼英雄は後ろに倒れる。

「英雄様!!」

「おい庶民」

「……………」

「王たる我を無視するとは、あずみ、あいつを捕まえてこい」

「はい、英雄さま」

呼ばれていても答えない上にさっさと下駄箱から出ていこうとする社をメイドが追いかける。

「おい、てめえ」

「……………」

「ちょっと待てや、根暗！」

「……………」

「そのてめえだよ、フードを被った根暗！！」

「……………」

何度声をかけても無視をする社にあずみと呼ばれたメイドが肉薄すると

腕をつかもうとするが社は見事にかわす、何度も掴もうとするが

掴もうとする度に不規則な動きをして頭をかくと言った行為をするため

伸ばした手は何度も空を切る、その度にあずみのイライラを倍増させる

しかも本人は意としないため尚タチが悪い

そして堪忍袋のおが切れたのか小太刀を抜き社に接近するが紙一重で回避される。

「てめえ、英雄様を無視するとはいい度胸だ」

「……………誰？」

「あたいは、九鬼家のメイド長をしてる忍足あずみだ」

「……………そうですか、じゃ」

「おい」

そう言っつて社は踵を返して帰ろうとするが

それをあずみは取り押さえようとするがスルスルリと逃げられ捕まえることができない

小太刀で怪我をさせても構わないつもりで一振り二振りするが当たることなく宙を切る

「……………物騒な物を振るうな」

「怪我したくないんだった、らあたいについてきな」

「うゝゝゝん、嫌かな」

「いい度胸だな、根暗」

「めんどくさ」

そう言っつてあずみは社に接近して小太刀を振るい、数度当たったと思っただが

社は自分の防塵防弾に改良したリュックで防ぐ

そして最後、確実に決まったと思っただ瞬間、社に小太刀を持つ手を掴まれ押し伏せられる

「物騒な物は没収」

そう言つて小太刀を取られ後ろ手に手錠をされ近くの柱にもう1つの手錠で固定される

「てめえ、根暗さつさと外せ!!」

「……………嫌ですけど」

「てめえ……………」

「物騒な事をしないと誓う?」

「そんなことする分けねえだろ」

「じゃあ当分そこで頭を冷してな

そんな薄着をしてると数時間で凍死だろうからせいぜい頑張つて
気休めだけど……………雨着、風邪ひかないようにね」

そう言つて持っていた雨着をあずみに広げて被せる

「いい度胸だ」

「度胸なんて無いけど……………じゃね」

「根暗あ、さつさと外せー！」

そんな叫びを無視して駐輪場に向かい自転車にまたがり本屋へと向かう

数十分後、忍足あずみの叫びに駆けつけた生徒に助けられる事となった。

翌日

S組では忍足あずみが少し厚着をして教室にいた。

「あずみ、大丈夫か」

「申し訳ありません英雄様」

「かまわん、あずみ、今日はゆっくり休むといい」

「まことに申し訳ありません」

それを見ていた準と冬馬が近寄り話し掛ける

「大丈夫ですか？」

「おいメイド、何があつたんだ？」

「昨日、フードを被った根暗にやられたんだよ」

「やはり奴か」

（準………フードを被った根暗とはやはり）

（あいつしか思い浮かばねえ）

「あいつって誰だこのハゲ」

「わかった、言うからその物騒な物はしまえ！」

あずみは小太刀を準の眉間からずらすし早く言えと促す
すると、S組の扉がノックされると同時に開く。
噂をすればなんとやら

そこには今準とあずみの会話に出てきたフードを被った男子生徒が
立っていた。

そして、無断で教室に入ってくる。

「昨日の根暗！！」

「……………ユキ、これ弁当……朝渡し忘れたから」

「わーい、やしろのお弁当」

「あたいを無視するとはいい度胸だな」

「やしろ、なにかやったの？」

「……………僕？」

「そつだよ、昨日はよくも……………くしゅ」

「昨日？……………ああ、誰だっけ？」

「忘れたのかよ」

一触即発の状況になるが、完全に覚えていない社はどうでもいいように対処する

そしてそれを見た準が突っ込む。

「昨日、あたいを手錠で拘束しただろ」

「ああ、忍足……………あずきさん」

「あずみだ、間違えるな根暗」

「ローマ字で書くとAZUMIとAZUKIだから当たらずとも遠からず

どうでもいいけど……………じゃね」

「根暗、あたいと勝負しろ」

「嫌ですけど、病人は帰って寝たら？」

「おいおい社」

「準、止めても無駄ですよ」

「若、それでも」

準は止めようとして冬馬止められる

そして、あずみが立ち上がると「あ、そうそう」と言っ社があずみに近づき

布に包まれた物を差し出す

「あたいと勝負する気になったか？」

「まさか、昨日の小太刀、錆びてないと思うけど一応見ておいて」

そう言うとそのまま踵を返してS組教室から出ていく

この日一日中忍足あずみに闘えと言われ続ける事になったが

午後の休み時間からはチャイムが鳴ると同時に教室から脱出して逃げ回っていたため

午後は意外と平和（？）に過ごすことができた

後に川神戦役を挑まれそうになるが、

二人の一週間分の弁当を作るということで、冬馬と準と言う伝でな

んとか回避する。

第4話（後書き）

読み返してみましたが僕ってやっぱり文才が……ない
国語力の問題だと思うので、以後努力します
今後ともよろしく願います。

第5話

1月13日

この日は、遅くまで図書室に残り試験前居残りをしていた。

何でそんなことをしているかと言うと、昨日、川神一子にしつこい頼まれそれに仕方なく

勉強を見る羽目になったからだ。

向かいに座っている川神一子は社が選んだ教科書の問題に頭を抱えて唸っていた。

どうやら難し過ぎたのか全10問の頭の方で止まったまま進んでいない。

それを見かねた社がシャープペンを取り問題が書かれているノートに筆先を走らせながら

問題の解説をしていく。

「この問題は、まず左辺の式に右辺のこれに移項させる」

「うんうん」

「次にこれを、ここに代入して……………はい計算」

「……………アタシがするの？」

「そつだよ、即座に回答3、2、1はい」

「ううううう」

唸りながら問題に筆を走らせる。
社は黙ってそれを見る。

次第に川神一子の鉛筆が止まり
うつ向いたまま動かなくなる。

悩んでいるのかと思い顔を除きこむと、見事に爆睡している。

「起きろ」

「アイタ」

そう言つて、ノートを筒状に丸めたもので頭を叩く。

すると川神一子が起きて頭を押さえながら怨めしそうに社を睨むが
社は、川神一子に顔を近づけて話し掛けると顔を紅くして答える。

「おはよう」

「…………おはよう」

「今、寝てたよね」

「ううん、起きてたよ」

「勉強に付き合ってる以上真面目にやって欲しいんですけど」

「寝てないってば！」

そう言つて、寝ていないことをアピールするが、「言い訳するんじゃないません」と言われたうえに軽いチョップを頭に食らい黙ってしまう。

しょうがないと考えた社は、ルーズリーフの1ページに、もっと分かりやすく

カラーペンを使って説明していく。

そして、それを見ながらやってみるように言つと悩みながら解答していく

なんとか全問、解答して社が答を合わせていく

結果、10問中4問正解、彼女にとっては大きな進歩だろう

……… 解答の仕方を見てるけど

そんな川神一子の頭に手を乗せると髪の毛をくしゃくしゃと撫でる

「良くできました」

「でも、アタシは全問解答できてないよ」

髪の毛を撫でられながら川神一子は頬を若干紅くして反応する。

「いや、全問解答できないのは当然だよ」

「何で？」

「この4問以外、ちよつと違う解き方だから
この方法でしかやっていない以上解けなくて当然」

「ひつどゝい」

「人生とは非道で理不尽なものだよ」

「あつ」

自分の過去を振り返りながら人生論をすると
川神一子が驚いたような顔でこちらを見る
そんな川神一子を見て「どうかした」と聞くと

「今……笑った？」

「!？」

どうやら妹と川神一子を重て見ていたらしく自然と笑みがこぼれて
いたらしい
彼女といるといつもペースを崩される、自分が自分じゃ無いように
感じる
そんな違和感に少し眉間を押さえる。

そして腕時計に目をやると既に18時を回っており外は完全に暗闇
となっていた

本日の成果は最後の10問の他、教科書の復習全般
まずまずの成果だろう。

帰り道

街路灯の明かりが道なりに地面を照しているなか
手にコンビニの袋を下げて自転車を押ながら歩く少年と鞆を肩から
下げた少女の影が並んで歩く

不知火社と川神一子だ

テスト対策を終わらせて帰る頃には日は沈み
暗闇が辺りを支配していた。

そして、社は何を血迷ったのか「家まで送る」と何故か言ってしまう
った

そして後々……と言うより今現在、絶賛後悔中と言う訳だ
そして、隣を歩く川神一子からの質問にただ延々と答える。

彼女も何が楽しくて僕に話し掛けたのだろうかと言う疑問が湧いて
きたが

どうでもいいかと思い、ひたすら質問に答え、話に相づちを打つ

「……………って言ったら大和達が大笑いしたの
ひどいと思わない？」

「そうだな」

「ねえ、ホントにちゃんと聞いてる？」

「ああ」

「どうでも良いみたいに流してない？」

「そうかもね」

「ひどいひどい！」

「ごめん、ちゃんと聞くから」

適当に返事をしていたことに対して叩くと言う行為で抗議する川神一子に謝ると

袋の中からほつとレモンと書かれたラベルが貼られた300ml程度の小さいペットボトルを取りだし

口をつけて飲む。

隣を歩く川神一子は白い息を吐きながら社を見つめる。

それに気がついた社はペットボトルを差し出す。

「飲みかけで良ければ飲むか？」

「え？良いの？……でも間接キス」

「？なんだって……あと、さっき買った肉まんと豚まんもある」

「それも食べて良いの？」

「勉強………と言うより、普段してない事をして疲れた顔してるし頑張ったから、ご褒美」

「やった」

そう言つてコンビニ袋から肉まんを取り出すと盛大にかぶりついて美味しそうに肉まんをほおばる

それを見た社も同じ様に口に含み豚まんを食べる

寒い日に食べるコンビニの肉まん等はどうしてこんなに美味しいのだらうと思ひ歩く。

不意に川神一子の方に視線をやると頬、と言うより完全ん唇に肉まんの具を付けていた。

勿論本人は気づいていない。

そして突拍子も無いことをする。

「具がついてる………」

「何々、どうしたの？」

呟くようにそう言つと、唇についた肉まんの具を指で摘まんて口に放り込む。

やった社本人は無自覚である行動も、やられた彼女自身とんでもない事をされたため

思考が通常より働いてしまいオーバーロードしたように顔を耳まで赤く染めて頭から煙を出している。

それでも社は、お構いなしに話し掛ける。

「どしたの？」

「な、なんでもないよ！！」

「？」

社は近くにおいても相手の変化には疎い。

そのうえどんな恥ずかしい事でも平気でやってのける。

要約すれば鈍感でバカな訳だ。

そのあとは沈黙が続きただ延々と歩くだけで会話は全くない。
そうこうしているうちに川神院の前に辿り着く。

「じゃあね不知火君」

「ああ、おやすみ川神一子」

「また明日学校で会おうね」

「はいはい、わかったからさっき渡したノートを見て
復習しておけよ」

「うん、じゃあね」

そう言つと川神一子は川神院に駆けていき見えなくなる。

社は川神一子を見送ると量に向かつて歩き出す。

帰る途中、何故自分は川神一子が相手だと調子を狂わされるのか考

えながら自転車をこぐが

結局答えは出ず、考えても仕方ないと言う結論にたどり着き考えるのをやめる

その後、寮に帰るとユキに「おそい」と怒られたがマシユマロを渡すと機嫌が少しは良くなるが

機嫌は悪いままだったが

社が「夕飯作るけど一緒に食べるか？」と聞くと機嫌は何故かよくなる

その後は食事を終え、ユキと一緒にテスト前の復習を行う、もっともいつも教務をきちんと受けている社は勉強せずともテストで点を取ることが出来るため必要は無いのだが

ユキの苦手なところや、ミスの多い所の見直しを行いうもっとも、勉強中ずっとユキの機嫌が良かったのを見て

やはり、女性の考えることは分らないと社はしみじみと感じるのであった。

第5話（後書き）

ちよつと疲れました。

最近仕事が忙しくて。

勿論高卒で仕事をしているので勉強等で時間もあまりありませんが更新は適度に行うように致しますので今後ともよろしくお願いいたします。

第6話

1月17日

一子 Side in

今日からテスト、勿論今まで以上に勉強したし
復習もした

先生は厳しかったけど、でも教えかたがすごく分かりやすいから
頼んでよかった。

今日もきちんと挨拶返してくれるかな。

そんなことを考えながら歩いていると大和達が話し掛けてくる。

「ワン子は今回も赤点だな」

「うるさいなあ、頭の中まで筋肉で出来てるガクトには言われたくないわよ」

「アタシは今回、自信があるんだぞ！」

「それが空振りじゃなければいいけどな」

「なにお、いつか大和達に『あの時はすみませんでした勉強を教えてくださいー子さん』
って言わせてやる」

「「「……………あはははは」「」」

「ワン子、ナイスジョーク」

「よかったねワン子、京にうけたよ」

「なによお、みんなしてバカにしてさあ」

「おい、あんまり妹をいじめるなよ、私が相手になるぞ」

「いいだろう」

「相手になるよ」

「ガクトが」

「俺かよ!!」

そう言つて、みんな一子を笑いそれに百代が反応して
岳人に百代の矛先を向け、岳人に百代が攻撃しようと思ったとき

「…………川神一子、おはよう」

「…………え？」

一子 Side out

社 Side in

「ユキ、いい加減降りて下さい」

「んん、いやだ」

「重い」

「おもくないよぉ」

「首を締めるな、くるしい」

「おもくない、ていせいしろ」

「わかったから、重くありません」

「社君、女性に対して体重の話は禁忌ですよ」

「まったく、ユキは本当に社にベッタリだな」

「喋ってないでユキを引き剥がしてくれ」

ユキは相変わらずパンを食べながら登校する社にベッタリとひっ付き、それに社は文句を言いそれを冬馬と準が楽しそうに意見を述べる。

いつもの4人で一緒に通ういつもの風景。

このメンバーといるとどうも楽しいと感じてしまう。

もう一人の調子を崩されるが悪い気分にならない例外
第一印象は”変なやつ”である

そんなことを思いながら歩いていると

冬馬が社に話しかける

「そう言えば社君、最近帰りが遅いようですが」

「何で知ってるんだ」

「ユキから聞きました」

「やしろ」

「何をしてようが僕の勝手だろ」

「ユキに心配をさせないでくださいね」

「ユキから電話が来ると、俺も若も心配するんだよ」

「その笑顔は……………怖いぞ冬馬」

冬馬が心配をさせないように笑顔で言い、準は自分も心配すると言
うこと伝えると

社は文句を言いながらもきちんと返事はする
それでも追求は終わらない。

「それで、何でいつも遅いんだ？」

「同じクラスのやつに勉強を教えている」

「男？女どっちだ？」

「女性だけど、どうしたの準？」

（社は他者に興味を持つことすらなかったのに……まさか、若）

（そうですね、準……これは）

「社君はその女性の事をどう思っているのですか？」

「どうも思いませんけど、ただ調子をよく狂わせてくれるやつと言っただけだ」

「そうですか」

「……………あ」

率直な感想を述べると期待していたような準と冬馬はホッとしたような

がっかりしたような表情をする。

ユキはホッとしたような感じがいつも一緒にいる社達にはよくわかったが

正門をくぐると目の前にいつもしつこく挨拶を迫ってくる少女のポ

二一テールが目に入る

いい加減にしつこく迫られるのは面倒だと思い気まぐれとは言え先に挨拶をしてしまうおうと思い
それを実行にうつす。

「……………川神一子、おはよう」

社 Side out

社が一子に挨拶をすると、その場にいた風間ファミリーと冬馬達（社を含まない）3人が目を見開き
一子に至っては目をしばしばさせ社が挨拶をしたのが摩訶不思議と言った表情をする
そんなことをお構いなしに社は一子に話しかける。

「どうかした？」

「先に挨拶してくるの初めてだな〜と思って」

「どうせ僕は暗いですよ」

「あ、いじけた」

「いじけましたね」

「そんなつもりで言ったんじゃないよぉ」

「どうでもいいか、それよかアレちゃんとやった？」

「勿論！」

「そうかそうか川神一子はやればできる子だ、誉めてやる」

そう言つて社は右手で一子の頭を撫でようと腕を伸ばすが頭に乗る前に動きを止めて
正門の方を後ろを振り返り

「ユキ、すまん、ちょっとばかり用事を思い出したから降りてくれ」

「どうしたんだ社」

「準……聞こえないのか！あの悪魔の足音が！」

「はぁ？」

「とにかくマズイ、すまん教室には先に行く、じゃ」

そう言つと、フードの上からでもわかるほど焦つたようになり
1年生が使っているC棟に向かって走つていき靴を一瞬で履き替える
と階段を一気に駆け登り姿を消す。

すると一分とたたず砂ぼこりを巻き上げながら一台の人力車が冬馬

達の前に到着する。
それを見た瞬間、冬馬と準は何故社が逃げたのか分かったため息をはく。

「おはよう庶民、我11Sのヒーロー九鬼英雄である！」

そう悪魔とはこれ……ではなく

「さすがです英雄様!!」

こっちの事で、以前色々有ってから面倒くさいことはしたくないと言って

毎日九鬼英雄の付き人である忍足あずみから逃げ回っているのである。

そんな光景も予鈴と共に終りを告げると朝のホームルームを挟んでテストが始まる。

テストが始まる寸前まで社は一子に付きっきりで一教科つつ復習していき

テストに備える

テストは2日掛けて行われ、テスト明けから採点が済んだ教科から順に帰ってくる。

早いものであればテスト期間終了の翌日には帰ってくるので何気に教師の頑張りが評価されるところである。

第6話（後書き）

ちよつとばかり読んで微妙です。

なんだから大和達が空気になってる気がして
というよりはなってますね。

まだまだ改善点ありと言ったところですね
以後鋭意努力です。

第7話

大和 Side in

「ワン子の様子が変だ」

「ワン子ならまだ来てないけど、急にどうしたのガクト」

「確かに私もそう思う、最近どうも様子がおかしい」

「具体的には？」

「話し掛けても上の空といった感じの時が目立つようになった」

中間テストも終り、今週も早金曜日である。

テストもぼちぼち帰って来て、久々に皆揃って金曜集会だがガクトが唐突に何か言い出した。

それでも最近のワン子の様子は確かに変だ。

テストはこのクラスも今日から返却され始めているが

昼食の時のワン子は悲壮感が全くなかった、それどころか機嫌が良
いと言っても過言ではないほど
嬉しそうだった。

今日はここに来たら話を聞いてみよう。

そう思った所にワン子が入ってくる。

「みんな、今日もお疲れさま」

「ワン子、お疲れ、今日も走ってきたの？」

「うん、今日は30km程走ってきたんだ」

「相変わらず凄いね、ワン子」

「まあねえ」

「それはそうとワン子、今日のテストの結果どうだった？」

「へっへ、これを見なさい」

そう言つて鞆の中からテストの答案用紙を取りだしみんなに見せる。

それは、本日返された結果は全て赤点回避という結果だった

そして、いいものでは40点台後半にも至っていた。

これをワン子一人で行ったとはとても思えない

………まさか、テスト当日の朝にワン子に挨拶した相手に関係しているのでは？

「一人で勉強したのか？」

「ううん、クラスの友達に教えてもらったのよ
最近は帰りに飲み物や肉まんを買ってくれたり
遅くなったときは家まで送ってくれるわね」

「それってこの前の……」

「それは言えないわ、約束だから」

「そいつとの？」

「そうよ」

やっぱり、そうか

うまく顔を見ることはできなかったが、どうも危ないやつに見える表情も深く被ったフードでよく分からなかったが、全てにおいて分からないことが多すぎる

俺の情報網で探ってみるべきだな

葵冬馬と一緒にいたがどんな関係か調べる必要もありそうだ。

なんにしても、ファミリーの安全は確保できるようにせねばならぬいな。

「それで、どんなやつなんだ？」

「えーとねえ、無気力無関心でいつも「どっか行け」とか「あっち行け」って言うてくるんだけどいい人よ」

「いつ勉強してたんだ？」

「放課後よ、その後も修行にも付き合ってくれるのよね」

「そいつは強いのか？」

「戦ったことないから分からないわでも、筋肉のつき方は凄かったわね、ほらCMでやってる細マッチョって感じのつき方よ」

「一度手合わせしてみたいものだ」

「ねえさん、物騒なこと言わないでくれよ」

「そうそう、常人がモモ先輩の一撃を食らっただけで即死しかねないんだから」

「おい、弟とガクトが生意気だ」

そう言ってガクトの腹部にボディーパーを叩き込み

大和の首を後ろから腕を十字にして締める

それに大和が謝ると笑顔で話して頭をグリグリと撫でる

「ねえさん、痛いからそれ

……それで、ワン子、そいつの教え方は上手だったか？」

「うん、分からないところを色ペンとか使いながら説明してくれるし勉強会の最後に小テストをするんだけど、答があつてると

いっつも頭撫でてくれるんだ、ちよっとくすぐりたいんだけどね、

エヘヘ」

「（小声）大和、もしかしてワン子……」

「（小声）その可能性は有るな、そいつの情報を集めなくては」

「（小声）妹に何かあったら、そいつの間接を外す」

「（小声）ねえさんがそれを言うともマジでやりそう」

「（小声）モモ先輩、容赦ねえからな」

「（小声）僕、自分がされるところ想像しちゃったよ」

若干頬を染めながら勉強会の事を言う一子に恋をしているのではないかと思う
そして、不安要素は早急に調べあげようと大和は考える。

大和 S i d e o u t

【同時刻】

「クシ、クシ、クシ」

「やしろっだいじょっぶ？」

「社君、風邪ですか」

「季節の変わり目は風邪ひきやすいからな」

「問題ない、誰か噂してるんだろ………悪い意味で」

「こういった言葉を知っていますか？」

『一誉め、二謗り、三惚れて』と言うものです」

「確か、くしゃみの回数で自分が誰にどう思われているのかわかる
といった世迷い言の一種だろ冬馬」

「そうですが、先程の言葉を信じるなら

もしかしたら誰かが社君に好意を寄せているのかも知れませんよ」

「ハッ、馬鹿馬鹿しい、誰が僕に好意を寄せるんだよ」

鼻で笑いそう言つと、そのまま歩き出す。

いつも通り4人で並んで帰る道は日が沈み暗くなっている。

いつまでたつてもこの4人は変わらないでいてほしい、そう思い
みんなの顔を見て後ろ歩きをすると

ユキも準も冬馬も笑ってくれる、それを見た社は

「ありがとう、そしてこれからもよろしく」

そう言つて笑う、いつまでも、そしてこれからも変わらないであろう
みんなに対して

何故そんな気持ちになったのかはわからない、でもこんな自分にいつまでも一緒にいてくれる友達に感謝をしたかっただけだろうだから口にしたそれだけ。

それがどんな言葉で表現されるのかわからないけど、これからよろしく

それはきちんと伝えたかった。

だから言葉にした、多分それだけだった。

第7話（後書き）

やっと更新ですが……微妙な終わりがたですね、はい、すみません。
次話はもう少し楽しみにしてみせます。
今後もしよろしく願います。

第8話

日曜日

「3月の春休みは一度帰れると思う…うん、だから部屋は一応開けておいて、よろしく

……わかった、電話代もバカにならないしそろそろ切るよ、じゃ」

祖父母のいる田舎に連絡をいれて帰る日の予定を伝えてから電話を切る。

そして手帳から電話番号の書かれたページを捲るとその中から1つの番号をチョイスし携帯電話の番号を押していく

なぜ携帯電話のアドレス帳に入れないかと言うと、

第1に面倒くさい、第2に毎回いれ忘れる、第3に機能に頼りすぎたくない

と言った理由から登録はしていない。

「お久しぶりです、久信さん」

『やあ、社くんじゃないかどうしたんだい？』

「例の暗器ですけど調整はうまくいってますか？」

『勿論、社くんの発注通り完璧なものを作っているよ
あとレプリカも同じ数だけ作っておけばいいんだね？』

「はい、よろしくお願いします」

『わかった、いつ頃取りに来るんだ?』

「3月の中旬から下旬、できるだけ早めに行きます」

『わかった……切るのちょっと待って』

電話を切ろうとすると、呼び止められる。

「何ですか?」

『やあ、社くん』

「げっ」

『今の「げっ」って何かな?』

「別に何も、それより何か用ですか、松永サン」

『語尾が変だよ、それに昔みたいに燕って呼んでよ』

「……そんなことのために替わってもらったの燕さん?」

『うつん違っよ、燕さん……か、今はそれでいいか
それより、社くんの持つてる携帯のアドレス教えて』

「めんどくさ、気が向いたらね」

『社くんの後ろめたい過去の情報を流すよ』

「脅迫、教えればいいんだね

赤外線………は無理だね、じゃあメールするから………って僕も知らないか

僕の周りで燕さんのアドレス知ってる人は………いないね
と言うことで、今回は諦めてね」

『それは、生殺しだよ』

「なにが」

『やっぱり、分からないか

それじゃあ、社くんのアドレス教えて、私が空メールと電話するか
ら』

「迷惑メールとイタ電、まあいつか………それじゃあ言うつよ」

『いつでもいいよ』

そう言つて電話番号とメールアドレスを言うと、すぐに携帯のバイ
ブレーションが振動し

メールが来た事を知らせる。

勿論電話中であるため閲覧はできないがメールが来た事を伝える。

『やっと聞けた、それじゃあたまに電話やメールをするから

その時はよろしくね』

「はいはい、このあと出掛けるから切るよ……言い忘れてた事があった」

『なに?』

「また、納豆送ってもらっていいかな」

『いいけど、どうして?』

「弁当や休日の食事で使うと、すぐに無くなるからレパートリーを増やせば増やすほど消費がなぜか早くなるだから、頼んだ」

『わかった、頼まれた

近いうちに納豆は送るから』

「ありがとう……燕」

『いきなり呼び捨て!?! 毎回唐突すぎ』

「何が?」

『何でもない、またね』

「あ、うん」

返事をする、受話器を勢いよく置く音が聞こえ耳鳴りがするが抗

議するも面倒だと思い

携帯をしまい、外出できる服装に着替えジャンパーを羽織り自転車の鍵を取ると外出時に欠かさず行っている警報装置の設置を済ませて外出をする。

第8話（後書き）

なんだかいつも通りグダグダでした。

今回は新ヒロインの燕さんを出してみました、よくわからないキャラって書きづらいですね。

主人公と燕さんの関係はストーリーの中に織り混ぜていきます。

第9話

一子 Side in

今日は皆で秘密基地の補充物品の買い出しに、ショッピングモールに来ている。

「大和おゝあと何か要るものあったっけ？」

「あとは蠟燭を買えば終了だよ、キャップ」

「それを買ったらさ、皆で食事しない？」

「ナイスアイデアよモロ、でも皆お金大丈夫」

「この前、大和が賭場で三万儲けたから大和の奢りだって」

「本当か弟!!」

「勿論だよ姉さん、でも今は荷物持つてるんだから抱きつかないでくれるかな」

「本当は嬉しいんじゃないのか、大和？」

「歩きづらいから、離れてくれよ」

相変わらずお姉様は大和で遊んでいる、それを見た岳人達は羨ましそうに見ている。

姉弟のスキンシップであるから疚しい事はないが、それでもお姉様とスキンシップをするやまとがちよつと羨ましいかな。
等と思いながら歩いていると岳人が口を開く。

「おい、ワン子…あれってお前が世話になってる」

「おお、不知火君だね」

「でもさあ、なんだかいつもフード被ってて変じゃないかな」

「どうしたんだモロロ、怖いのか？」

「違うよ、ワン子が心配なだけ」

「それもそうだが、あいつなにやってんだ？」

いつもの三人といえるのではなく一人でジャンパーのかかっているハンガーを取ったり戻したりを繰り返している
気に入らなくて迷っていると言った感じである。

「声かけてみるか」

「キャップはいつも唐突だね」

「だってよお、あいつ面白そうな匂いがするぜ」

「確かにそうだな、それに妹が世話になってるし声をかけるくらいいいだろう」

「でも今は観察にしないか？」

「なんでだ大和」

「不安定要素が多すぎる」

「わかった、早速観察だ」

一子 Side out

かくして、風間ファミリーの社追跡兼観察が始まる。

社はこの時風間ファミリーの会話が手に取るように聞こえていたが無視して買い物をしていき

休憩ついでに喫茶店に入り、コーヒーとケーキを注文する。

その時、妙に絶望感漂う悲しい音楽が流れだす。

すると社がポケットから携帯電話を取りだし電話に出る。

「はい、山田です」

「（小声）今の着メロ悲しすぎない？」

「（小声）こいつが暗いのはわかっていたが…ここまでとは」

「（小声）って言うか山田って偽名使わなかった？」

「（小声）アタシも初めて名前を聞いたとき、山田太郎って言われたわ」

「（小声）ワン子にもそんなことしてるんだ」

「げっ」

『こら、相変わらず第一声に「げっ」て言うのやめてほしいかな』

「ごめん、いつも弄られてた思い出ばかりだから、つい」

『それでも傷つくよ』

「悪かったよ、燕さん……で、用事があつて電話してきたんでしょ」

『逃げたな、後で覚えておくように』

それに、最初に「げっ」って言ったってことはアドレス登録してないでしょう」

「携帯のアドレス帳は基本いじらないから……」

『きちんと入れておいてよ』

「はいはい、それより電話代かかるから、用件をどうぞ」

『なんだかひどい扱いだなあ。私は社くと話したいのに』

「素直に喜んでおきますよ」

『そう、よかった』

それで、用件は今日納豆を送ったから明日明後日には着くと思うよ』

「ホントに……ありがとう燕さん、愛してる……友達として」

基本的に松永納豆が好きであるため、何かとんでもないことを口走ったが

後々からかわれないよう、最後にキチンと言付け加える。

これは、兄が教えた殺し文句であるが……使った当人はどういう時に使うか全く知らないため

一応幼馴染みには効果てきめんだったりするのはまた別の話である。

『男女の関係でもいいのに』

「お友達で……それでも、ありがとう……今度なにかご馳走するよ僕にできるのはそれくらいだから

代金の件は『あれ』の支払いの時に一緒に払うって久信さんに伝えてください」

『わかったよ、それじゃあ楽しみにしてるからね、またね』

「（小声）今の会話どっかで聞いたことないか？」

「（小声）京と大和の会話にそっくりね」

「（小声）あいつでも冗談って言うんだな、って言うかどうかしたワ
ン子」

先程の電話の内容を（実際は社の声だけ）聞いていた一子はなぜか
不機嫌オーラを出していた。

本人は自覚していないが社が自分に対して話しをするときは明け
透けに態度が違う事と

電話の相手が女性である可能性が高いと考えているため、嫉妬して
いるわけだが

彼女がこの感情に気がつくのはもう少し先の話である。

そんな会話をしているとまた社の電話が鳴り、それに社が出るとフ
ードの上からでは分かりにくい
が
少し真剣味を帯びる。

そして、ケーキとコーヒーを飲むとそのまま会計を済ませ出ていき
それを風間ファミリーが追う。

「（小声）あいつにも葵達以外の友達っていたんだな」

「（小声）キャップ、まだ追跡するの？」

「（小声）どうするかな……おっ曲がった、追っぞ！」

そんな会話をしていると社が角を曲がったためそれを追って社が曲がったのと同じ角を曲がったが

そこは、かなり長い一本道だったがそこに社の姿はなく風間ファミリーは追跡を断念せざるをえなかった。

第9話（後書き）

なんとか書き終わり。

今回は会話がかなり多い気がしますが、そんなのもいいかも
としたりしています。

次回はちょっと社が仕事します。

第10話

月曜日

夜

顔に仮面を着用し黒いロングコートを着た人影がアーチェリーを構え監視カメラの機械的動きに合わせてピアノ線をより細くしたモノが付いた矢を射ると、敷地内の木に当ててピアノ線を張り塀を越えると地面に音もなく着地する。

「こちら社、侵入に成功」

『こちら支援ポイント01より、真つ直ぐ36メートル前進その後その場で次の指示が有るまで待機』

「了解」

指示に従い、地面から1メートルの高さを保ち中腰で全速の8割の速さで進み建物の角で止まり次の指示を待つ。
すると次の指示が入ってくる。

『こちら支援ポイント3、6秒待機後に警備が通り過ぎる』

通りすぎたら裏口に警備が2人いる、無力化して内部に侵入」

「了解」

そして、その指示通り待機すると警備員が二人通りすぎる。

それを確認すると、裏口の近くにある茂みまで進み、隠れると一人が欠伸をしたのを見た瞬間に茂みから出る

「なんだ貴様は!？」

「こいつ何処から出て…ガア!!」

茂みから中腰状態で接近すると、裏口に立っていた一人の顎を下から蹴り上げ

もう一人に胸部への掌底を入れ呼吸を一時的とは言え困難な状態にすると

足を払い地面に倒し口にスタンガンを突っ込み……

「スタンガンを口の中で使用するとどうなるかな？」

「んが!!!!」

そう言っただけで容赦なく改良スタンガンの電流をMAXである120万ボルトで使用する。

すると警備員は白目を剥き出し失神する。

これで当分は起きないだろう。

そして先に倒した方にはクロロホルムを染み込ませたガーゼを口元に押さえ付け

眠らせるとタイラップで親指を括り、ガムテープでがんに隠す。

その後、暗証番号式のセキュリティを携帯端末を使って解除して侵入する。

「こちら社、侵入成功これより独自行動に移行する」

予定通り建物に入り、渡された指示書通りの手順で仕事を進めていく。そんなとき今朝の出来事が脳裏を過る。

朝、不知火の家の人間が仕事の内容が符号形式で構成された文書として持ってくる。

そこには、地図と仕事の内容、警備の人員から巡回ルートと仕事の支援をする人数が記されていた。

相変わらず不知火家の情報網の広さと精度に驚きながら目を通す。

そして頭の中に記憶として叩き込むと指示書をライターで火をつけ

灰にしてから
登校する。

教室に入るといつもと同じく川神一子が挨拶をしてくる。

「おはよう」

「ん（会釈）」

頭の中は今晚の仕事で一杯だったため、いつも洪々とは言え挨拶していたため
この反応はあまりに不自然だったかもしれない。

「どうしたの」

「何が？」

「いつも、適当だけど挨拶してくれるのに今日は会釈だけだから」

「そうか、別段これと言って何もないが」

「そう？……でも何かあれば相談してね」

「気が向いたらね」

「絶対だよ」

なんだかんだ言いながらも、心配された。

相変わらずよくわからない奴だ

などと思いつつ今日はできる限り

誰とも関わらないように過ごした、勿論冬馬達も例外とせず。

現在

まったく仕事中に何を考えてるんだろっね僕は……

それより仕事仕事と言い聞かせ先に進む

しかし施設内に侵入したのはいいが警備員が異常なまでに少ない。

少ないに超したことは事はないがそれでも違和感は隠しきれない。

それは自分が誘き寄せられ、餌に真っ直ぐ進まされている獲物のような感覚。

故に警戒は絶対に怠らない。

すると廊下がT字になって交わっているところから二人分の足音が聞こえる

コートの下に革のナイフケースに入ったナイフにフックが先端に付

いたピアノ線を接続して

真っ直ぐ投げると壁に突き刺さりピアノ線が張られると全く警戒していなかった見回りの一人がピアノ線を首に引っ掛け後ろに倒れる。

それを確認すると三段式の特殊警棒を両手に持ち一気に伸ばすとナイフとピアノ線を回収しながら接近し

もう一人の顔を横風ぎに強打すると酔っぱらったようにふらふらとよるめき倒れ

強打した箇所から血が滲み出るが、もう一人を始末するため振り返り未だに起き上がろうとしないもう一人の股間に蹴りを入れると痙攣したこのようにガクガクと震えた後悶絶する。

そして二人をガムテープで縛り上げて、口にもガムテープを張り喋れなくしてからトイレの個室に放置して
目的の場所へと向かう。

第10話（後書き）

今回は前編後編で構成しました。

次回は後編いきます、週末までには掲載します。

第11話（前書き）

週末に投稿するのを目標にしていたのですが、仕事が何故か今週に
まとまっていたので

色々誤字脱字が目立つかもしれませんが、なんとか投稿しました。

だらだら書いた状態なので、かなりの駄文ですが本編をどうぞ。

第11話

東京都 とある邸宅

一つの部屋のパソコンが起動し、画面には様々な情報が流れるように映っては消える、と言った事を繰り返す。

そして、画面にはデータが一つの端末にコピーされる事を告げるウインドウが開かれ

どんどんコピーされていく。

それを見ながら仮面を着けた社はコピー終了を待つが無線が入る

『すまない社、こちらで負傷者が発生した』

「どういうことだ」

『いきなり一人の男が襲いかかってきて
一人つつやられた』

「どうするんだ？」

『人質はとられてないが、二人ほど怪我の状態がこのままだと不味い、先に撤収するが構わないか？』

「あとは脱出するだけだから、問題ない」

『すまない』

そうして無線は切られる。

今さらながら、自分にそんな簡単な仕事が回ってくるはずもないと思いつつ端末を操作をするが
次の瞬間、社がいる部屋の扉が開け放たれる。

「侵入者つてのはデメエか？」

「……………」

「まあ、聞かなくともそこにいるってことは間違いねえか」

「…これも仕事だ、これが終わったら帰らせてもらおう」

「そうはいかねえんだよ」

その時、この部屋にある3つの扉の2つ目が開かれると拳銃を持った複数名が入ってくるなり
社に発砲する。

それをバクテンする要領で体を捻りながら回避して、着地と同時に
閃光手榴弾を投げパソコンが乗っている机の後ろに隠れる。

すると高熱を伴う発光と鼓膜を揺さぶる大音響が響き渡る

それによる火傷により、銃を持った数名を無力化

そして正面の扉の前にいる相手に向き合う。

よく見ると不気味な笑みをこちらに向けている

そしてコピーが終るのと同時にその男は口を開く。

「おめえ容赦ねえなあ、あ…それは俺も同じか」

「釈迦堂君、さつさと始末したまえ」

「わかりましたよ、先生
と言っわけで、行くぜ」

「こちらの仕事は終わった、帰らせてもらう」

「ところがどっこい、そうは問屋が卸さない」

男は口を吊り上げ楽しそうに笑う。

コイツは完全な戦闘狂の類いだと社は確信すると逃げるのは困難だと判断する。

そして、真ん中で二本に別れたナイフを両手に構え

「そこをどけ！」

「ここは通さん！」

そう言う” 先ずは相手の小手調べだ” と思い、ある程度手加減して相手にナイフを振るう。

しかし、ナイフは当たることなく誰もいない空間を切っただけだった。

そして、小手調べだと思い攻撃したことを後悔した。

「なんだよ、その遅い攻撃は！」

「なっ！！速い！？」

「まずはこれでも喰らっとけ」

まずいと思った瞬間に社の体は宙を舞いパソコンが乗った机に殴り飛ばされる。

しかし、相手の拳が当たる瞬間に左腕でガードしながら地面から少しだけ体を浮かし防御するが

防弾のコートでも衝撃は抑えきれず

胸部にも衝撃が伝わり、メシリという音と同時に肺の空気を一瞬で持っていかれる。

「か……はっ、ひゅう……はっ、かはっ」

「これも仕事なんでね、悪く思っなよボウズ」

足音を響かせ釈迦堂と呼ばれた男は歩み寄ってくる。

そして肋骨が折れたであろう激痛で目が霞みそうになるが齒を食い縛り

それに耐えながら立ち上がり、もう一度ナイフを構える。

「おっ！まだ立てるのか？若いつてのは良いねえ」

「うるせえ」

「あ？」

「こちら仕事だ、手加減はもうしない」

「だったら、さっさとかかってこいや！」

「後悔………するなよ」

そう言った途端、釈迦堂は顔面への衝撃と共に体が宙に浮き壁に叩きつけられる

元川神院師範代の釈迦堂ですら殆ど追うことの出来ない速さでありそれも一瞬の出来事で目視することもできない程の神速だった。

釈迦堂は、目の前に立つ男がいつの間にか持ち変えた警棒で殴り飛ばされたと

壁から剥がれ落ち、地面に伏してから初めて気づく。

「イツツ、テメエ今のは何なんだ警棒は愚か、その軌道すら見えなかったぞ」

「だから手加減しないと云っただろ
そして付け加えたはずだ、後悔するなと」

「久々に強敵の予感だ、こつちとらめんどくせえ仕事だと思ってたがこりゃあ、とんだビックリ箱だったってわけだ
俺も本気をだすかな」

そう云って釈迦堂は立ち上がろうとするが

「仕事も終わった、今回は敵を殲滅することじゃない
それに、肋骨が数本折られた上に右手も内出血が限界を越えて外部に出血し始めた、
だから今日はこれでお仕舞い」

そう云って発煙手榴弾を着火し社は一目散に最後に残った閉まってる扉を蹴破ると

廊下に転がり出て敷地外に出るルートを思いだし猛ダッシュし記憶にある地図に重ねていき
そのルートをとどり下水道を通り敷地の外へ出るとワイヤーを活用してビルとビルを縦横無尽に駆け巡り屋敷から離れる。

数キロ渡り歩いたところで目眩が酷くなつたため一度休もうと思い

とあるビルの上で

仮面とコートを脱ぎ捨て傷口を見るが傷が8割型塞がり僅に出血しているだけであり

肋骨も殆ど繋がりに何も問題は無かったが、痛みは増すばかりであった。

そして、コートからメディカルキットを取り出し傷を消毒してガーゼと止血帯で塞ぎ

コートと仮面を着ける。

「くっ……痛みが、半端じゃない

今までに対峙した相手が比較にならないほどのあの強さは一体何だったんだ

肋骨も殆ど繋がったが、まさか折られるとは……

次会ったら………コロス

社会的にも精神的にも、肉体的にも抹殺してやる」

そして、今までに感じたことがないほどの殺意が自分の中で渦巻いていたが

精神力で押さえ込むとまた

川神市に向かい、ビルの間を縦横無尽に渡り歩き変態橋のところで地面に立ち歩道を歩く。

ドン

「おっと」

「うわぁ」

暗い中、気を外部へ漏らさない上、気を探ることも出来ない社が
人にぶつかるのは必然だったのかもしれない。

第12話

??? Side in

初めて深夜に外出することが許可された。
厚着をしていても外の寒さが露出している肌にひんやりとした空気を運び

今ここにいる実感を与える。

歩きながらそんなことを考えていると。

ドン

「おつと」

「うわぁ」

誰かとぶつかり倒れてしまう。

しかも、左手は抑えられて動かすことができず
何故か右の胸を圧迫されている感覚がした。

「あの……」

「すみません、周りを気にしていませんでした」フニフニ

「ん……あ」

「何だ？この柔らかいものは？」フニフニ

「んあ……手を動かさないでほしい、それは……ん、義経の胸だ！」

「！？# D ✂ □ ○ ……！！」

自分の胸を触っていることを伝えようと、相手は勢いよく自分から離れ頬をヒクヒクとひきつっていた。

そして、義経が立ち上がると謝罪する。

「すまない、触る気はなかつ……痛っ」

「もしかして、義経とぶつかったときに怪我をしたのか？」

そう言つて、相手は左腕を押さえながら顔をしかめる。

それを見た義経は、相手が抑えた左腕を捕つて怪我の状態を見ようとするがすぐに逃げられる

自分のせいではないかという気持ちがあつたためそうさせていた。

そして何度も逃げられるため、本気を出して腕をつかむが

今度は勢いが余り、相手も足を絡ませ社を義経が押し倒した状態になる。

とてもわかりにくかったが倒れる寸前に、社は少し体をずらし義経を庇うような位置に動いていた。

「いてて、怪我とかない？」

「義経は大丈夫だ、君こそ左腕は平気なのか？」

「ん……ああ、これはぶつかった時のじゃないから君が気に病むことじゃない」

「そうか、よかった」

そう言って、義経は安堵する。

しかし、今の状態は社が華奢な女性に押し倒されたような状態であり（実際に押し倒されたようなものだが）社が相手を庇ったとは言いがたい状況だった。

それにともない、社の胸部に女性特有の柔らかいものが押し付けられる。

勿論いつもの社であればどうでもいいと思うが、今は先の戦闘で第六感までの全ての感覚が研ぎ澄まされた状態であるため、

コートの上からでも感じるその物体が、社の平常心を乱していたどちらかと言うと、既に平常心ではない気がするがそれ以上に不味い状態になる。

「あの……さあ」

「どうかしたのか？」

「すぐに離れてもらえるかな、その……当たってる」

「当たっているとは、なにがだ？」

「君の胸」

「え………な!？」

そう言つて顔を真つ赤にしながら社の上から飛び退き少し離れる。

義経が飛び退いてから起き上がると社自身も起き上がりコートに付いた埃を払い

義経についてきて、と言うと並んで歩き出す。

ぶつかった事に対する謝罪をしたいと思い、ついてくるように促す。

義経は、さっきの出来事も相まって平常心を維持すら出来ていなかった。

勿論社自身もそれに近い状態だが、それでも社の精神力が普段通りの自分を演出し始める。

「一つ聞いてもいいか」

「な、なんだろうか？」

「さっきから『義経』『義経』と言っているが何を言っているんだ」

「義経は、義経の名前だ」

「……………？それは君の名前とってこと？」

「そうだ、因みに名字は源だ」

「歴史の人物の名前って……………それに、一人称が義経と言つのはわかりづらいな」

「そうだろうか、では義経はどうしたらいいだろうか」

「そうだな、俺と言うのは流石に無いとして

僕や私が世間一般では使われているな、でも決めるのは僕じゃない
義経自身だ、自分の言いたいように言えばいい」

「そうか、ありがとう／＼／」

「何で礼を言う」

自分の言いたいように言えばいいと言って、義経の頭に手をおき
くしゃくしゃと撫でると顔を真っ赤にしてお礼を言う。

「それより、君の名前を聞いてもいいだろうか？」

「山田次郎だ」

そう言うと、義経は名前も知らない相手に生暖かい眼差しを向ける。

「流石にそれは偽名だと義経でもわかる」

「そうだよ、川神一子には山田太郎で通じたんだが

……僕の名前は社、不知火 社だ

勘違いするな、気紛れで教えるだけだ」

「不知火社と言うのか、どう呼べばいいだろうか」

「不知火でも、社でも呼びやすい方でいいだろ」

「では、社君と呼んでもいいだろうか」

「そっちの方が呼びやすいならそれでいい」

社がそう言うと、義経はまた顔を赤くしてうつむく。

それから二人の間に会話が殆どなかったが、橋を渡り終え近くの自販機に社は一直線に向かうと

自販機の前で少し離れた場所にいる義経にコイコイと手招きする。

それを見た義経は何だろうと思ひ近づくと

完全に油断していたところで、手の上に何か熱いものを乗せられる。

「……………!？」

「熱かった」

「流石に熱すぎる！何だこれは！？」

「缶コーヒーならぬ缶紅茶」

寒いなか手袋をしていない手に乗せられたため思わず落としてしまった

それを社は拾い上げると、社は義経のジャンパーの中からセーターの袖を引っ張り出すと
それを手に掛かるようにして、その上に缶のタブを開いて置く。

「こうすれば熱くないだろ」

「ありがとう、しかも開けてくれるとわ」

「開けづらিদらうと思ったから開けただけだ」

二人で並んで飲むと、何故か社の飲み物も気になり見てしまうとそれに気付いた社が義経の顔を覗き込む。

「僕のも飲む？」

「いいのか？」

「いいけど、その代わり義経のやつも一口ちょうだい」

「わかった」

お互い口をつけた缶ジュースを交換する。

「このコーヒーは甘めの味だな、嫌いではない」

「こっちの紅茶は初めてだけど、以外と美味しい」

「……………まさか義経は、今間接キスをしたのか？」

「どつたの？」

缶ジュースを飲んでいる義経の顔が赤くなりブツブツと独り言を言い出したため

社はどうかしたのかと思ひ声をかけると勢いよく離れてしまう。

義経はどうしたのだろうか、与一や弁慶と接していてもこんな感情は無かったのに

今日の義経は何だか変だ、平常心平常心。

などと言っているのは聞こえていたが

顔を赤くした姿を見た社は放っておくべきかな、と思ひ声をかけないようにする。

十数分後に平常心を取り戻したが、義経の心臓の鼓動は一向に収ま

ろうとしない

そんな状態を知ってか知らずか社は声をかける

「義経」

「うわぁー!!」

「さっきから驚いてばかりだな、それより遅いから家まで送るけどどうする?」

「義経は大丈夫だ、すぐ近くに迎えがいる」

「わかった、それじゃあ僕は帰るよ、おやすみ義経」

「おやすみ、社君」

そう言つて社は手をふると背中を向けて帰っていく。

その姿を義経は見送り車に乗ると、車はすぐに発進する。

このとき、二人は後に川神学園で会うことになるなど思つてもいなかった。

義経 Side out

社は義経と別れてから、一人毒づいていた。

「報告も済ませていないのに、僕は何をしているんだ
僕も生温くなったものだ」

そう言つて携帯電話を取りだし不知火本家に連絡をいれ
寮に帰る。

帰る途中も独り言をブツブツと独り言を呟く、傍目から見れば危な
い人だ。

「しかも、知らない女性にぶつかったあげく胸を掴んでしまつし
そのあと飲み物を奢るなんて

でも燕さんと同じで少しいい香りが……………って違つたろ社」

独り言に突っ込みをいれる、なんともシュールな光景だ。

「川神一子に対してもなぜあんな風に接してしまうんだ
くそ、最近の僕はおかしいだろ」

自分の中で、川神一子に対する接し方もそうだが最近の自分の言動は
今までの自分からは考えられないことだ。

そしてこの事は、社自身の『今後の自分の在り方』を考えること
になった。

第12話（後書き）

私は国家公務員です。

税金泥棒とか言わないでください。

詳しい仕事は言えませんが、18で国家公務員と言えば何かわかる気もしますが。

覚えることが多いくて忙しいとおもってください、実際そうですから。

今回は1月28日発売のマジ恋！Sの義経を出しました。

マジ恋！S、発売がとても待ち遠しいですね。

第13話（前書き）

すいません話数を間違えました

第13話

1年C組 教室

「一子殿、今日も美しい」

「あはは……ありがとう九鬼君」

「我とお茶などどうでしょうか？」

「今はいいかな」

「うむ、残念だ」

「おい、いい加減にしろよ九鬼、ワン子も困ってるだろ」

「下がれ庶民！……しかし、一子殿が困るのは我も望まん」

相も変わらず、九鬼英雄は川神一子に告白をする。

しかし、今は風間ファミリーの全員がC組の教室にいるため島津岳人が抗議すると

九鬼も引き下がる。

その時、C組教室の扉が開かれ二人の生徒が入ってくる。

「社は……いねえな」

「そうですね、風紀委員の仕事で正門前にいましたがまだ戻っていないようですね」

「我が友冬馬、どうしたのだ？」

「英雄ですか、社を探しているのですが……しかし、英雄が普通の制服を着るなんてどうしたんですか？」

「うむ、これは今朝のことだ我が……」

英雄が何故普通の制服を着ているのか説明しようとしたとき廊下から誰かの走る足音と叫び声が聞こえる。

「によわあ、しつこいのじゃー!!」

「やかましい」

「なんじゃこれは!! 離すのじゃー!!」

「誰が離すか戯け」

何事かと思ひ各クラスの扉や廊下に面している窓から生徒が顔を出す。

そこには風紀委員の腕章を着けてジャンパーにフードを被った男が

不死川心を何かで拘束していた。

「社……なにやってんだ？」

「何に見える？」

「捕り物」

「はい正解、正解した井上準君にマシユマロを進呈しよう」

「わーい、って俺はユキかー!!」ベシ

「アイタ……でもノリが良いしナイス突っ込み、流石準」

そう言っつて社の頭を軽く叩きながら突っ込みを入れる
そして何故こうなったのか質問する。

「で、何でこんなことになってんだ？」

「制服着用指導強化、月に二回風紀委員で実施
傍迷惑な事」

「それで今に至ると」

「そ、でも制服を羽織ってる2年に注意したら『お前、強いだろ』
って殴られた」

「おうおう、頬腫れてるな……って言うか避けなかったのか？」

「いい加減離すのじゃー!!」

「嫌だね、きちんと制服を着ない方が悪いんだヨ」

「此方を誰か知った上でやっておるのか！」

「当然、家の名前を盾に好き放題している我が儘娘」

「此方が我が儘だと申すのか！」

「え………違うの」

無表情のまま驚いたような口調で話し出す。

「なんじゃその反応はー!!」

「行こうか」

「離すのじゃー!!」

「まて………」

「おお九鬼君、助けてくれるのか？」

不死川心を更衣室へ引きずって行こうとしたその時
一人の男から待ったがかかり、それに不死川心は助かったと期待の
眼差しを向けるが……

「社と言ったな、貴様とは何処かで会ったことが有るだろうか？」

「僕とねえ、ないんじゃない」

「助けてくれぬのか！」

期待は見事に裏切られた

そしてその話を聞いていた冬馬が割り込んでくる

「社と英雄は昔は仲が良かったじゃないですか」

「冬馬、英雄って……昔野球でよく勝負してたあいつ？」

「私と同じで差別することもなく接していましたよね
鮮明には覚えていませんか？」

「覚えてるけど……」

「やはりそうか聞き覚えのある名だと思った訳だ」

「その時は神風だったけどね、肩の怪我は完治したのか？」

「いや、完治はしておらん！」

「早く治るといいな」

「要らぬ心配をかけたな」

「気にするな、んじゃ行こうか不死川さん」

「嫌なのじゃ」

どこまでも往生際の悪い不死川心に対して
痛みを鎮痛剤を服用して抑えている社はイラつきを覚え

不死川心の顔を除き混み、不気味な笑みを心にも見えるようにする。

「いい加減にしてください、僕も怒りますよ」

「ヒッ……し、しかし此方は学校の許可は得ておるわ！」

「だから？」

「だからこの格好でも問題ないと言いたいのじゃ」

「九鬼君も僕の言うことを聞いて制服を着てくれたのに
君はできないんだ」

「九鬼君もお前の言うことを聞いておったのか!？」

「彼にできて君にできないなんて

ナニ、君ってチキン？臆病者なんだ、選民じゃなくて駄民だね
これはいいことを知った、噂でも流そうかな」

「此方は臆病者じゃないのじゃ！それに此方は選民なのじゃ
だから着ようと思えば着れるのじゃ」

「更衣室へ行こうか」

社の言葉のうまい具合に誘導され更衣室へ引きずられていく
それでも抗議するのが不死川心だが……

「なんでそうなるのじゃ！！」

「着れるって言ったから」

「此方は平民と同じことはしないのじゃ！！」

「着れるって言ったの嘘だったんだ、有言実行も出来ないなんて不
死川も程度が知れるね」

「嘘じゃないのじゃ、此方もそれぐらい着れるのじゃ！！」

「着れるって言ったね、はい更衣室へ行こうか……因みに言ったこ
とに対しての反論は受け付けないから
自分で言ったことくらい守ろうね小娘」ニコリ

「ヒツ……く、く……悔しいのじゃ!!」

本当に悔しそうな顔をして引き摺られていく。

しかし口車にのせられてしまった不死川の敗けであることは誰の目から見ても明白だったため
誰も助けることはしなかった。

「若、あいつってあんなキャラだっけ」

「腕の怪我がイライラを募らせていたみたいですね」

「だな」

「我也同じように口車にのせられてしまった
しかし、社は昔に比べて雰囲気が本当に変わったな」

「英雄に口で勝つとはスゲーな」

「我が友社とまた話をしたいな」

「彼に話を通しておきましょう、拒否しそうですが」

「頼むぞ、我が友冬馬よ」

「わかりました最善は尽くしますよ、英雄」

不知火社……旧姓：神風社
かみなぎ やしろ

英雄が怪我したときも冬馬と同じで態度を変えることなく接し
小学4年の時にあった”あの事件”の末、引越すまでの間ずっと
話をして

お互いにぶつかったり、相談しあったりと結構仲がよく
社が母の実家に引越してから、ごく希に手紙のやり取りをして
いた。

が数年前から社も家の仕事に参加し始めてから、修行と仕事と勉強
で時間もなくなり

英雄も家の手伝いや勉強で時間もなくなり
次第に手紙のやり取りが無くなっていたため、お互いわからないの
は当然だったのかもしれない。

そして、この日は全校生徒の1年から3年まで、とある1年の風紀
委員による脅迫紛いの説得や
口撃を受けたことにより、どんよりとした空気が漂う1日となり
社にビクビクして過ごすこととなった、勿論葵冬馬や川神百代を除
き……。

第13話（後書き）

P i x i vで主人公のイメージを投稿してみました
不知火社で出るのを見てみてください

第14話

喫茶「百番街」

社は、向かいには異性の女性が座り机の上に置かれたカップに注がれたコーヒーに砂糖とミルクをこれでもかと言うほど入れる甘党と言うヤツだ。

そこにケーキと言う付属品が有れば至福の時間となるだろうが、緊縮財政の真っ只中であるためケーキは我慢である。

つと、ここにいる経緯はと言うと……

本日昼休み 1年S組教室

「準」、放して欲しいんですけど」ズルズル

「これも若の頼みだ、我慢してくれ」

川神学園 C棟、E組、F組、S組のクラスがある階の廊下を
井上準が不知火社の襟を掴んで引きずっていると言う光景は
今朝の制服着用指導強化で、誰彼構わず注意していた社を知る者は
道を開ける。

そしてS組教室の前に来ると、榊原小雪が寄ってくる。

「あ、やしろだ〜」

「ユキ、相変わらずいい子だ
マシユマロをあげよう」

「わーい」

そう言っつて社はジャンパーのポケットからマシユマロを取りだし餌
付けする

とは言っつてもこれは第三者から見た見え方であり本人にそんなつも
りは
はつきり言っつて全くない。

勿論、冬馬や準にとってはいつもの光景であり当たり前なのである。

「社、すいません

英雄が社と話をしたいと言っつものですから

社は『英雄が話をしたいと言っつているから来てください』
と言っつても来ないでしょう」

「当然、流石冬馬、よくわかってるね」

「誉めてもなにも出ませんよ」

「別に見返りを要求してる訳じゃないし……と言っわけ帰る」

「準」

「あいよ」

「グエ」

そう言っ準は社の襟を掴むと社はカエルが潰れたような声を出して止まる。

そして準に向かって準や冬馬に分かるような笑顔で文句をいい始める。

「準、いきなり襟を掴んでんじゃねえボケ

尻の……失礼、臀部の穴から手をつ突っ込んで

奥歯ガタガタ言わせたるか」

「訂正したけど完全に同じことを言おうとしたよね!？」

「社は相変わらずの口の悪さですね」

「そんなことより我が友社、今日は頼み事があって呼んでもらった」
「断る」

「即答するな社、ここでは話せん故にあずみが指定した場所にこい来なければ社の寮に乗り込むまでだ
それよりも、あずみに連れてこさせるか」

「拒否権なしとは、また迷惑な

はいはい、わかりましたよ忍足あずみさんについていきますから」

「わかれば良い」

適当に返事をする周囲の人間は社に軽蔑の視線を向ける。
そんなことはどうでもいいという態度で受け流し廊下に出る。

「じゃあ、よろしく忍足あずみさん」

「英雄様の命令じゃなきゃ、こんなことはしねえよ」

「そうですか、では放課後はよろしくお願いします」

「わかったよ、ったく」

そうして別れて今現在……

「おそいなあ」

「英雄様は多望だ、もう少し待ちやがれ」

「わかってるよ」

「しかし英雄様も何故こんなヤツにあの件を……………」

「どうかした？」

「何でもねえよ」

「さいですか」

忍足あずみが、何かブツブツ言い社はそれについて聞き返すが
聴覚が異常な社にとってその言葉は手に取るように分かってしまうが
確信を得るには至らず対人関係が苦手な社は、どう対応すべきか迷
っている

「待たせたな我が友社よ」

「別にいい、どうせ今日は非番だしな」

「そうか、では率直に頼もう
今現在九鬼家では偉人のクローンを作っている
そこで社にその者達を鍛えて欲しいのだ」

「なんともまあ壮絶なお話、で日時は？」

「今週末の日曜日だ」

「日曜か……土曜は冬馬達が寮に来るけど、日曜はどうせ暇だし鍛練だと思えばどうと言うことはないか」

社は手帳の予定を見てOKすると九鬼英雄はどこか嬉しそうに頬を緩める

「そうか、やはり受けて受けてくれるか」

「今回は馴染みの友人の願いで、仕方なくだ」

「それでも、我は嬉しいのだ
また社と話ができ、顔を見られることがな！」

「そうか、僕もそうかもな」

その後、社と英雄は、お互いに家業を継ぐために勉強と仕事浸けの日々の辛かったことや

遣り甲斐などどんどん盛り上がる

気づくと、小一時間程社と英雄は昔の話に花を咲かせていた。

「英雄様、間もなく定例会議のお時間です」

「なんと！もうそのような時間か、時が進むのは早いな
社よ今日は話せて楽しかったぞ！」

「そうか、家業頑張れよ」

「我を誰だと思っている、皆のヒーロー九鬼英雄であるぞ」

「そうだったな」

「あずみよ、社を家まで誰かに送らせろ」

「はい、英雄様！しばしお待ちください
李、こちらの方を家まで送りなさい」

「はい」

「彼女の名は李静始、九鬼家でも屈指の強さを誇っている精鋭だ
安心するが良い」

「別にそこまでしなくともいいのに……」

「久々に話せたのだ、気ぐらい使わせる社よ！」

「わかったよ、ありがたくそうさせてもらっ」

「行くぞあずみ！！」

「はい、英雄様！！」

「ばいばい」ひらひら

そう言うと、英雄は人力車に乗って一気に遠ざかり消える
それを社は手を振って見送ると振り返り忍足あずみが呼んだメイド
と向かい合う。

「ええっと、李さんだよな」

「はい」

「僕は一人で帰れるからこのまま、のんびりと九鬼家に帰っていいよ」

「そうはいきません、家まで送らせていただきます」

「頑固者……まあいいか」

そう言って歩き出すが周囲の目が何故か刺さるような鋭さを孕んでいる

社は勿論そんなことは気にするはずもなく、ひたすら前を向いて歩き
自販機でファン。を買つと社の少し後を歩いていた李が口を開く。

「ファン。の新商品が出るとファン達が喜ぶそうです」

「……？」

「ギャグに少しは反応してください」

「ギャグ？……ああファン。とファン達を掛けたわけね

初心者には難易度が高いな」

そつつっこみを入れるが次の瞬間、社の体は自然と動く。

「っ!？」

「間一髪」

今の状況を纏めると社が李を抱き寄せている状態である。

何故そうなったかと言うと、社と英雄が喫茶店で話をしている間に短時間とは言えど雨が降り水溜まりを作っていた。

そこを車が通り水が跳ねたため、社が李を抱き寄せ李が濡れ鼠になることを避けたのだ。

しかし、李の今の状態は頬を若干赤らめ心拍数が上がっている状態だ。

何故なら抱き寄せられる（しかも異性）と言うことが全く無かったが故

免疫が無いため今の状態となっている。

そんな状態でも、お構いなしに話し掛けるのが社である。

「濡れていませんか」

「ええ、おかげさまで」

「よかったよ」

「しかし、できれば早急に離れていただきたく思います」

「失礼」

そう言つて社は李を解放する。

それから無言であつたが一つ変わったことと言えば

李が社の少し後ではなく横を歩いていた事ぐらいだろう。
数分歩くと寮に着く。

「到着です、ここまでありがとうございます」

「いえ、お気になさらず仕事ですので」

「そうですか……どうかしましたか」

「その、先程の事はできれば内密にしてください」

李は少し躊躇うように口を開く。

『先程の事』が分からず社が？マークを浮かべると李が補足説明する

「その、水しぶきの件です」

「別に言うつもりもないけど、これは二人の秘密と言つことですね」

「はい、二人の秘密……です」

そう言つて李は頬を若干赤らめる。

そして踵を返すとどこか嬉しそうに歩きだし九鬼家に帰る。

そんな後ろ姿を見送つた後自分も寮に入るとユキが仁王立ちしていた。

「どうしたんだユキ」

「やしろ、いまのひとつてだれ」

「英雄の家のメイドだけど」

「なかよさそうだったから、かんけいをきかせてほしいな」

「いや、関係もなにも…」

「きかせてほしいな」

「わかつたよ」

社が諦めたように頷き、社の部屋でユキによる尋問が始まった。

勿論社がユキに暴力を振るえる筈もなく、されるがままに痛めつけられ

なんの関係も無いと分かるとユキも社から離れて謝る。

何故謝つたかと言うと、ユキや準曰く

「やしろのこちよこちよは容赦がないかららしい。」

そして波乱の一日がまた終わりを告げる。

第14話（後書き）

今回はpropellerのネタに走ってみました。

エヴォリミットからレナート・エフィンジャー君の毒舌と
バレット・バトラーズからリック・アロースミスの天然なところす

詳しくはドラマCDとゲーム本編をお持ちの方は前述のモノにて
ご確認ください。

第15話

1月27日 火曜日

「大和おゝ、姉は退屈で死にそうだぞ」

「朝からテンション低いね、姉さん」

「最近、挑戦者がめつきり来なくなったからな仕方ない、こうなったら大和で遊ぼう」

「ちよっ！？姉さん、待って」

「問答無用だゝ、ほゝら高い高い」

「姉さん、やめてくれ恥ずかしい！！」

最近挑戦者が減ったことにより、朝からテンションがとてつもなく低い百代が

一子の所属する1年C組で、何故かそこに集まっている風間ファミリーの大和を弄くる。

……とは言っても、実際のところ百代が大和を弄るのではなく、大和で遊ぶと言うのが現状である。

「お姉様、アタシも遊んで」

「帰ったなら、今は大和で遊ぶんだ」

「帰るまでお預けか、ガックシ」

「良いなあ、大和ばかりモモ先輩に構ってもらえてよお」

「でも、どっちかって言うと大和が遊ばれてる気がするけど
岳人はそれでも構ってほしいの？」

「モモ先輩なら俺はイケる」

「岳人、お前実はMなのか？」

「ちげえよキャップ、年上の魅力ってやつだよ」

「よわからんな」

「キャップは、まだまだガキだな」

「なんだとおー！！」

「やるのかー！！」

「二人も仲いいね」

「さすがの俺様も、男どおしなんて勘弁してくれ」

「確かに、俺もそれは勘弁してほしいぜ」

一子が百代に構ってもらおうとするが、今は大和で遊んでいるため
帰るまでのお預けをくらい

モロのツツコミ（？）に岳人とキャップ、双方共に否定をする。
実際男同士の恋愛に喜びそうなのは、椎名京位である。

大和が百代に弄られていると、教室の外から何かを転がす音と二名
ほどの男の声が聞こえ
教室に入ってくる

誰も予想しないカタチで

「おい社、危ないぞ」

「大丈夫だよ」

（カラカラカラ、ガッシャーン）

「アガッ」

今の状況を説明すると

キャスター付きの椅子に座りながら教室に入ろうとする社を
井上準が止めようとするが
それを無視して教室に入ろうとして、扉のレールにキャスターが引
っ掛かり

盛大に転けた。

その後は、言うに及ばず全員が奇怪なモノを見る目線を社に向ける。

「おいおい、大丈夫か？」

「つつ……でも、以外と楽しい」

「今のが楽しいのかよ」

「もっかいやろ」

「やんのかよ!？」

そんなツツコミを無視して廊下に椅子を引きずって出ると、また同じように椅子に座ったまま教室に入り、また盛大に転けた。

「痛いね」

「だったらするなよ」

「へいへいほ」

「なんだ、そのやる気の無い返事は」

「べつに………はあ、今日だけで脳細胞が一万個死んだ」

「なんだ、やる気の無い返答と豆知識は!？」

準がそんなツツコミをいれると、社は椅子の横に掛かっている鍵付きの鞆から

本を出すとそれを準に渡す

勿論この時もずっと椅子に座りながら移動する。

「その椅子どうするんだ？」

「視聴覚室に持っていく」

「それと、この本は？」

「冬馬に渡してちょうだい、頼まれてたヤツだから言えば分かるよ」

「わかった、んじゃ行くか」

「ん」

その時社の後ろに誰かがのし掛かる。

背中に当たる二つのとある柔らかいものから女性だとわかるその上、社にそんなことをする女子は一人しかいない。

「おっは」

「ユキ〱おはようさん」

「ユキか、若はどこにいるんだ？」

「トーマなら廊下にいるよ」

「若は今日も口説いてるのか」

「ユキ、マシユマロをあげよう」

「わーい、やしろもたべる？」

「じゃあ、貰おうかな」

「はんぶんこ」

社とユキはマシユマロを半分づつ食べる

二人にとっては何気ないいつものスキンシップなのだが

周りから見ると仲がいい友達と言うより、恋人同士（？）に見えるものだが

当の二人は周囲に興味ナシ

そんな二人が少し心配になるが、いつか二人も周囲に心を開くだろうと思

特にこれと言って言うことはしない。

「ユキ、ちょっと降りて」

「やだ」

「オシゴトオシゴト、すぐに行かなきゃ授業に間に合わないからさ」

「わかった」

そう言つてユキを背中から下ろすとまた椅子に座つて廊下に向かつて進む

そんな事すれば当然……

ガツ「どわ」ガシャン

転けるわけだが、それを社は楽しむ。

Mでは決してありません、そうMでは決してないのです

大事なことなので、二回言いました。

椅子に乗つて廊下の先に消えるとユキと準も自分達の教室に帰る。

十数分後

「ちょっと転けすぎたかな」

「不知火君おはよう、それと大丈夫？」

「ん、別に怪我した訳じゃないから」

「そっか、でもみんな引いてたよ」

「周囲がどう思おうと知った事じゃない」

「でも……」

「HRが始まる、ささつと席に戻れ
それと、”俺”に二度と近づくな」

「え？」

教室に帰ってきた社は、社を心配して近づいてきた一子を素っ気ない態度で引き離すと

どこか落ち込んだようになり一子は席に戻る。

その後この件が、川神百代と勝負する羽目になる切っ掛けになったなど

この時は社は想像すら出来なかった。

第16話

1月29日 秘密基地

大和 Side in

今日はキャップに緊急集会と言うことで呼び出され秘密基地に集まっている

追加するべき事項は此処にワン子の姿は無いと言う事ぐらいだろう。

そしてキャップが口を開く。

「今日みんなに集まってもらったのは
最近ワン子の様子が変だからだ、学校でもそうだがモモ先輩曰く川
神院でも元気がないらしい」

「ワン子に何かあったと見て間違いないな」

「ワン子に直接聞くのが手っ取り早いな」

「だがな大和、ワン子は頑なに口を開かないんだ」

「ワン子なら簡単に口を滑らせると思っけど」

「今回は本当に話さない上に食事の量も減っているんだ」

「あのワン子がか!？」

百代の一言にキャップは驚いて声を発する。

何故ならいつものワン子はどんぶり飯と言っても過言ではないほどよく食べるからだ

それほどよく食べるワン子が減食すると言っことは相当なことが有ったと見て間違いないだろう。

一刻も早く元気がない原因を見つけ出そう、と大和は思うが翌日、その原因を目の当たりにする。

大和 S i d e o u t

翌日

「だから……」

「アタシは平気だってば」

「ワン子、嘘が下手だぞ……いつもの元気が全く感じられないぞ」

「そうだぞワン子、何か有ったなら俺達に言えよ
俺達は風間ファミリーだろ!！」

「それは、そうだけど……」

登校中に風間ファミリーのみんなが悩みを聞こうとするが
頑なに口を開こうとしない
そして生徒会と風紀委員の挨拶が樹こる川神学園の正門に近づくと
一子の顔がひきつる

正門

「おはようございます、ほら不知火君」

「……何で僕が」

「何でって、そりゃ次期副委員長だから」

「聞いてないんですけど」

「今言ったからね」

「この委員長、タチが悪い」

社と風紀委員長の話し声が聞こえると
一子は頬を叩き社に近づいていくと

「不知火君、おはよう」

「……………ナニ？二度と近づくなつて言つただろ
聞いてなかったのか君は……………」

「アタシは不知火君が何と言おうと友達だと思つてるから」

「いい加減にしろ、今までの事は気紛れだ
それだけで友達なんてお人好しも度が過ぎると迷惑以外の何でもな
いぞ」

「……………迷惑」

「すみません委員長、今の僕に今日の挨拶活動は無理です」

「風紀委員が風紀を乱しちゃ駄目じゃないか、まあ今日は上がつて
いいよ

何か複雑な事なんですよ

しかし君が感情的になるなんて珍しいね、それでも、きちんと仲直
りするよに」

「……………善処します」

そして、社は今まで以上に落ち込んだ一子を無視して正門から離れ
ようとする

しかし、誰かに腕を掴まれ振り向き様に殴られ、よろめくが殴った
相手を見据え

殴られた頬をさする。

「…………なに？」

「てめえ、ワン子にナニ言っただか分かってんのか!!」

「部外者は首を突っ込まないで下さい、バンダナのクソガキ」

フードのせいで表情は読み取れないが、声のトーンの変化の無さと口の悪さが相手の怒りを逆撫でする

と、そこに風紀委員長が割って入る

「こらこら、えっと……風間君だよね、風紀委員の前で暴力は捨て置けないからさ、落ち着こう、ね、ね」

「どいてくれ先輩!」

「確かに彼に原因があるようだけど、今は君が悪いよ
まあ、風紀委員なのに風紀を乱した社が一番悪いけど」

「俺様もワン子の気持ちを踏みにじって平気なヤツはブツ飛ばさなきゃ気がすまねえ!!」

「こらこらそ島津君も、暴力は……………」

「キャップ、ガクト、もう良いわよ」

「良くねえ!!」

「いいの、アタシが近付かなければいいんだから」

「ワン子はそれでいいのか？」

「迷惑かけてごめんね不知火君」

そんな一子のかすれるような言葉を無視して社は教室に向かう
それを見た2年生の風紀委員長は頭を掻いて一人呟く

「彼の排他的な性格は何とかしなくては
社君が風紀委員からいなくなるのは損失だしブツブツ……………」

こうして、風間翔一と島津岳人を含む風間ファミリーに不完全燃焼
の存在を作り
この一件は幕を閉じる。

時間が飛ぶこと昼休み

今朝の出来事が口伝てに広がりクラスは朝から険悪な状態が続いて
いた

「ワン子、飯行こうぜ」

「キャップ」

翔一が一子を食事に誘いに来ると同時に社が鞆を持って椅子から立ち上がり

教室を出ようとすると

「やつしろくん、屋上で弁当食べようそうしよう」

「断る、て言うより委員長、いつも急ですね」

「ちよーつと話したいことが有るからね」

「離せ」

「委員長権限で命令だ、レッツだゴー」

「離してください、先輩」

そう言つて風紀委員長（瀬戸慎一郎）の2年生は、社を引きずつて教室から消える

そんな姿を風間翔一と川神一子を含む1年C組にいる生徒は呆然と見送る。

場所は移動して棟屋上

「いただきます」

「いただきます」

「それにしても、遠い所に座るね」

「委員長と僕のココロの距離です」

「はは、ちょっと傷つくね、じゃあ移動しようかな」

二人は椅子に座り弁当を広げる

勿論二人の弁当は手作りである

座る位置は、瀬戸慎一郎から１メートル以上離れた場所に社が座り食事をするが

慎一郎が社の隣に座り食べながら話を始める。

「単刀直入に聞くけど、川神さんの妹と何か有ったの？」

「別になにも」

「なにも無いにしても、あの対応は不自然過ぎると思つよ」

「そうですか」（棒読み）

「相変わらず素っ気ないね」

「そうですね」（棒読み）

「その問題は、僕じゃ力になれないかな？」

「なれません」

「即答か、悲しいね」

「これは僕自身の問題ですから」

「わかった困ったらいつでも相談に乗るから、いつでもウェルカム……それじゃあ、唐揚げもくらい」

「じゃあ、先輩のコロッケ貰います」

「あゝ僕の好物が」ガビン

慎一郎が、いつの間にか深刻な雰囲気からふざけた感じに変わると社の唐揚げを奪うも逆にガードが薄くなっていた弁当箱からコロッケを奪われ落ち込む

しかし、社の一手間かけた唐揚げの美味しさに和み、

この唐揚げはコロッケの代わりにしては等価ではないな

等と思っていたりするのとは別の話である。

その後、社と慎一郎は昼食を終え、慎一郎はどこか嬉しそうに、社はどこか嫌々

と言った雰囲気醸し出しながら各々の教室に向かう。

午後は言うに及ばず、社が戻った教室はピリピリした空気が漂いとても気まずい状態でHR終了まで全員が精神的に疲れた状態で過ごす。

ホームルームが終るとみんなが席をたち、あるものは部活に、あるものは委員会に、またあるものは帰路につく。社は、完全に最後の部類に入る。

勿論委員会がある時は委員会に参加するなど、何気に律儀なところが有ったりもする。

しかし、普段の態度から理解されることは皆無である。

社が寮に戻るため土手の上を、自転車を押して歩いていると目の前に川神学園の制服を着たガタイのいい男と、以前制服着用指導のときに制服を羽織っていたため注意した女が社の目の前に立ち塞がる。

風間ファミリーの島津岳人と川神百代だ。

そんな二人に躊躇う事なく口を開く。

「進行方向に立たれると邪魔だから、退いてください」

「私たちがどくと思うか」

「ワン子がいいと言っても俺様たちはテメエを許せねえんだよだから、顔をかせ」

「断る、君達に許しを乞おうとは思わない、だからさっさとどけよ」

「ほう、謝罪するつもりはないと言っのか」

「なら身をもって知れ」

社が口調を少し楽しそうに変えて敬語をつけずに断ると
岳人は一言言うなり社の顔面を殴り自転車をもその場に残し社は土手
の下に殴り飛ばされる。

第16話（後書き）

次回

ワン子を拒絶した社に鉄拳制裁！

何故社が一子を拒絶したのか次回明らかに

………する予定

第17話

川原

百代 Side in

私が今まで死合たいと思っていたヤツが岳人と殴り合になり、一方的に殴られているのを見て自分の目が信じられなかった。

普段の足捌きもそうだが、あいつの動きにはどこか武術に精通しているトコロがあつたが
今日の前で一方的に殴られても、殴り返さないヤツが同一人物でないように見えてしまう

すでに十五発以上殴られても防戦一方で、闘う素振りすら見せない。

「オラア!!」

「……………」ジャリ

大和から渡され今動いているモノも、今は必要だつたのではないかと思えてしまう。

そんな中、岳人が社の顔面に右正拳突きを繰り出したのを見て私はワン子を泣かせたあいつの敗北が決まったと思つたが

それはすぐに間違いだと気付かされる。

何故なら、社は両手を振っているだけだったからだ。

それに加え、岳人の最後の一撃は相手の左頬に正確に入っていたため脳震盪は免れないはずだった。

そして、社は口を開く。

「1つ聞いてもいいかな」

「何だよ？」

「川神一子は、僕の事を嫌ってくれたかな」

「んな訳ねえだろ、ワン子はお前の事をまだ友達だと思ってるんだよんな事もわかんねえのか!!」

「あの…お人好し……」

「そんなことも分からねえなら、もっと殴らなきゃ気がすまなくなっただぜ!!!」

そう言つて岳人が社に大振りの一撃を叩き込もうとするが

伸ばした腕を掴まれると、そのまま足を払われ流れるような綺麗な動きで投げ飛ばされる。

「仲がいいんだね君達は、でも君は僕に十七発の攻撃をしたんだから

当然やり返される覚悟はあるよね」

そう一言告げると、立ち上がった岳人の顎に今までに見たこともないほど鋭い

突きを繰り出すと十二発の正拳突きと二発の蹴りを間隔を開けることなく

正確に同じ箇所叩き込む。

それでも倒れない岳人に社が

「いい加減に倒れてください、あなたが立っている以上僕も攻撃を加えます、部外者なのですから倒れたっていいですよ」

「良くねえんだよ、ファミリーの仲間を傷つけたんだ
ここで倒れるわけにはいかねえ」

「そこまで、彼女の事を……僕は……」

今あいつは悲しそうな顔をしなかったか？

フードの下顔をきちんと見れない以上確める術はない。

そして、社は何か呟き岳人が立っている場所のすぐ横にある橋の支柱を足場にして走ると

そのまま岳人の顔面に横から回し蹴りを叩き込む

何とか腕でガードしていた岳人は立っていた場所から5メートル程吹き飛ばされると

その場に両膝をつきながら社を見据える。

「紫電神名流 神威壱式 旋風脚 できれば使いたくなかった
もう立たないで下さい」

「そうは……いかねえん……だよ」

「なら、先に謝っておくよ、ごめん」

最後に謝ると社は、ジャンパ袖口から何か光るものを取り出すと
岳人の首筋に突き立てる、その後岳人は地面に音をたてて倒れ動か
なくなる。

「岳人に何をしたんだ！」

「首筋のツボに針を刺して力が入らないようにしただけ
死にはしない」

「ワン子だけじゃなく岳人まで傷つけるのか！お前は……！」

「所詮他人でしかない」

「ならば、私はお前を私は許さない」

「あなたに許しを乞いはしない、それに女性に暴力を………」

「行くぞ……！」

「くっ!？」

その瞬間、社の顔面に衝撃が走り体は宙に浮き20メートルちかく吹き飛ばされる。

百代 Side out

地面に倒れる感覚と共に土が口に入り、鉄の味が口一杯に広がると鼻腔の中を温かい液体が流れ地面に滴り落ちる

顔面に炸裂した一撃を軽減するために体を宙に浮かせた筈なのに衝撃は体の奥底を突き抜けるかの如く響き、社の体に激痛を残す。

岳人の時は重心が乗ってない上に腕力に任せたパンチだったため社にほんの少しの極僅かな痛みを残す程度だったが

百代の正拳突きは重心が乗っているため重たく、とても鋭かった。

顔面に走る激痛に顔を歪め鼻を抑えながら立ち上がると

血を手の甲で拭くと地面に血が飛沫を残し地面に染み込む。

「な、にを……………」

「お前の話をするときには笑っていたワン子を泣かせたんだ

そんなお前には、まだ足りない」

「僕は彼女に妹の面影を重ねただけで、友達なんて思ったことはない」

「なに!？」

「自分が見てないところの事まで分かるか

それに、川神一子が僕をどう思っているかが僕は彼女を拒絶しなきゃいけないんだ

それに、僕だってあんなことを川神一子に言いたいわけないだろ」

「どういう意味だ？」

「あの時から僕の周りでいろいろな不幸が続いた、それも僕に関わった人限定で」

「あの時？」

「だから、彼女に辛い思いをしてほしくないんだ
僕の事を、友達だと言った彼女を

……だから僕は彼女を拒絶した」

「お前、ワン子の事を……」

「だから、止まらない……僕は後戻り出来ないんだよ!!」

「!？」

そう口にした瞬間、百代の視界は逆さまになり地面に叩きつけられ自分を投げ飛ばしたであろう社に受け身をとりながら向かい合つとそこにはジャンパーを脱ぎ捨てた社が、百代をうつすらと開いた悲しそうな目で見つめる。

そんな社に百代は殴りかかり、社の体に正拳突きを叩き込むが態勢を崩したはずの社の掌底が百代の顎にヒットする

その瞬間、百代の視界が一瞬霞むが瞬間回復ですぐに戻る

しかし、そんな百代の視界一杯に迫っていたのは社の掌でありそれが額に直撃する。

本来の百代であればかわす事が容易であつたはずの一撃であつたが今の怒りで心を乱された百代に回避する術は無かつたが

百代は着地すると同時に地面を蹴り社に殴りかかり八発体に叩き込む

しかし、社はまた小さな声で

「ごめんなさい」

と呟くと、接近してくる百代の攻撃を回避しながら各所にある神経節に

集中して内部への攻撃をする

その攻撃をする間も、百代の攻撃は社の体のあちこちに的確に入りその数は、二十発ではとどまることは無かつた。

そして社も神経節以外にも、百代の急所に的確に攻撃をする

そして社の耳に聞こえる骨の軋みと折れる音が脳に響くように木霊する。

端から見れば互角に近いが、百代に傷が残らないような攻撃をする

社が不利だった

実際に本気でやり合っても勝てるか定かでないのは明白であるが相手にできる限り傷が残らないようにすると言うのは殺すつもりでない限り曲げたくない社の信念のようなものであり曲げることはまず無いと言って良いものだった。

そして二人は少し離れたところまで間合いを開けると社は膝をつき血が混じった唾を地面に吐き捨てると

百代に向かい合うと、これ以上はお互いがもたないと一言言つと百代に背を向け土手を登り始める。

万全な状態であれば、楽な坂が重い体を引きずって上ると鉛を持っているような錯覚を覚える。

そんな社の背中を百代は見送るしかなかった

何故なら百代は自分の体の違和感に気がついたからだ。

それは、体に力が入らず右の肘を曲げようとすると何故か肩が動くといったものと

所々に見える社が百代に与えた攻撃の傷が全くと云っていいほど治っていないと言うことだった

百代は違和感の原因であろう社を見てから溜め息をつく、体の回復を待ち

数十分の後、回復したところで外傷がほとんど見てとれない岳人を担ぎ秘密基地へと向かう。

その頃、社は自転車を押して何とか寮に帰り、シャワーを軽く浴びると

敷いたままの布団に倒れ込みそのまま意識を手放した。

大和 Side in

俺達は、全員が驚いた。

何故なら、後から来ると言っていた姉さんが所々に青アザがある岳人を担いで入ってきたからだ。

何でそんなことになったのかと言う経緯を聞くと、どうやら不知火社と殴り合をしたと言うことだった。

「モモ先輩と岳人を殴るなんて、許せない」

「そうだよ、ワン子だけじゃなくモモ先輩と岳人まで傷つけたんだから」

「あんなヤツ死ねばいいんだよ」

「京とモロ口は落ち着け、今回の事は私と岳人にも非があるそれに、あいつのワン子に対する本音も聞けた」

「「「えっ?」「」」

「姉さん、それって……」

「あいつの過去が関係しているらしい、詳しいことは言わなかったからな」

だが、あいつはワン子に不幸になってほしくないと言っていた

勿論そこに嘘は感じなかった」

「不知火君……」

「あいつについては様子見をしようじゃないか、ワン子も来週の月曜にでも話しかけてみる

少しはまともに返事もすると思うからな」

「お姉さまがそう言うならそうしてみるわ」

このとき一子は、また拒絶されるのではないかと思ったが月曜に勇気を出して話しかけてみようと思いを新たにす。

第18話

高槻寮 男子部屋

「痛い……」

布団の中で体のあちこちが悲鳴をあげる。

理由は至極簡単、昨日の喧嘩だ

そんな体で寝返りをうつと、体に電流が流れるような激痛を感じる。そこで骨折した箇所を触ると折れた形跡を感じ取る事は出来なかったが
打ち身のような痛みを感じたため、触るのをやめるとウィズが寄ってくる

「にゃ〜」ペロペロ

「おはようウィズ、昨日の夜は食事を摂ってないからお腹空いたのか？」

「にゃ〜」

ウィズと呼ばれた子猫は社の問いかけに答えるように社の頬を舐める。

何だかざらざらした感触に少し夢見心地になるが

あちこち痛む体に、鞭打って布団から起き上がり時計に目をやると時間は8時前であり、半日以上寝ていたことに気づく。

何とか起き上がると、パソコンの電源を入れメール（家族もしくは仕事関係か松永信久から来る）を確認するためメールのアイコンをクリックして受信ボックスを開くと……

何故か件名から見てとれる訳だが燕からのメールが入っていた。

僕ってP Cのアドレス……教えたっけ？

答えは否

教えた覚えがない

ならば何故知っている

僕が教えたのか？

それはない

そんな堂々巡りをしているとS k y p uに着信が入る。

それに急いで出る、勿論家からだと思い出たわけだがそれは間違いだった

「おはようございます、今日は……」

「おはよう、社くん」

「なんであんたが出るんだ、そして何故僕のSkypeのアドレスを知っている」

「この前電話したときにメールで教えてくれたじゃん」

「まさか……………」

数日前、早朝に電話とメールの着信音で起こされたときの事を思い出す

その時は寝惚けていたため何を話したのか事細かに覚えているわけではなかったが何かをOKをした覚えがあったため、迂闊だった自分に頭を抱えるがすぐに持ち直しノートパソコンの画面に向かい合う。

「で、今日は何の用？」

「不機嫌？」

「別に不機嫌じゃないですけど」

「それならよかった、今日は話がしたかったから」

「そうですか……………あ、納豆ありがとうございます
今回も美味しくいただいています」

「ほんと？よかった、無くなったらまた言ってね」

「ありがとう、その時はよろしく願いいたします」

燕さんを相手にすると、納豆の話題が必ず出る

まあ、美味しいから僕は構わないのだけれど、つばめさんはどう思っているのだろうか。

そんなことを考えていると燕が話題を変える

「学校はどう、楽しんでるかな？」

「まずまず、かな」

「なに？その反応」

「色々あるの、うちの学校は体罰について最初に了承しなきゃ入れないような特殊さだからね」

「体罰許可って珍しいね」

「その他もろもろ特殊だから」

「面白そうな学校だね」

「いや、正味疲れる」（キッパリ）

「私はそう言うの好きだけど」

「僕は苦手だ」

「社君の性格ならそうかもね、それはそうと次はいつ帰ってくるの

「？」

「冬休み……かな？」

「まだまだ先だね」

燕は、どこか残念そうな顔をするが直ぐにどこか適当な雰囲気に戻る。

それに普段は気づかない社がこの日に限って表情の変化を的確に捉えていた

「残念そうだね燕さん」

「そう見える？」

「ええ、どこことなくそう見えます」

「それは社君に、早く会いたいからね」

「冗談？」

「冗談じゃないよ、会いたいつて言うのは本心だよ」

「………僕も燕さんに会いたい………のかな」

「ホ、ホントに？」

「幼馴染みだしね、だから今度帰ったときに、どこか遊びに行きま

せんか？」

「本当？本当に本当？」

「やけに念を押しますね」

「社君と出掛けるのは嬉しいからね、約束だよ」

「はいはい」

「あ……ごめん、友達と出かける時間だからまた連絡するね」

「はいはい、楽しんでおいで」

「じゃね」

最後は明るくなったな、女性はよくわからん。

最後にどことなく明るくなったな燕を見て頭をかき立ち上がると
小さめの皿を取りだし、その上に缶詰を開けて中身をのせ少しほ
ぐしてから

差し出すとよほどお腹が空いていたのかガツガツと食べる。

それを見た社も菓子パンをかごから取りだし自分も朝食を摂る
なんとも言えない食事であるが二食抜くと相当お腹は空くものだ。

それから、社はコンピューターをインターネットに接続して調べも
のをしたり

フラッシュゲームと呼ばれる類いのゲームをして午前を過ごす。

昼過ぎ

「おはよ〜」

「ユキ、もう昼だぞ……寝癖すごいな」

「こんにちは？」

「聞くなよ、ほれ口開ける……あーん」

「あ〜ん」

昼過ぎになってから起きてきた小雪の寝癖でボサボサの髪を、社が軽く手櫛ですいてから

机に突っ伏している小雪の口に蒸し器から取り出した叉焼を放り込む

「なにこれ、これなに？」

「叉焼、今日の昼食のラーメンにのせようかと思って、美味しいか？」

「うん！！でもちよつと辛い……」

「分量のをミスしたか？」

そう言つて蒸し器に向き直ると寮の玄関をノックする音が聞こえたため

宅急便かと思い玄関に行くが二人の見慣れたシルエットが磨りガラス越しからでもわかつたため

小雪に指示を出し直ぐに戸を開き迎え入れさせる。

「やしろ、じゅんとーまが来たよ」

「よう社、不景気なツラしてるな」

「準、そんなこと言つてはいけませんよ

すみませんね、社達はこれから昼食ですか？」

「ユキと食べようと思つて準備中」

「私達も一緒にいただけますか？」

「いいけど、食べて来なかつたの？」

「若も俺も食わずにきた、だから予定より早くに来たと言つわけだ」

「そう、じゃあ座つて」

社が湯だつた鍋に振り返り、麺を投入して強火で茹でていく。

それと平行して、フライパンにニラ、ニンニク、モヤシ、鷹の爪、中華スープを少々etcを胡麻油をしいたフライパンで

一気に焼いていく。

すると食欲を誘う香ばしい匂いが部屋に広がる

「社の手つきは相変わらずですね」

「しかもいい匂いがするな」

「いいにほいだね」

そうしている間に麺がゆで上がりフライパンの上の食材にも火が通り
どんぶりにツユをお湯でうすめ、次に麺をいれその上に具材をのせる
最後に自家製叉焼をのせて出来上がり。

しかし、鮮やかに見える手際によさだが、どこか動きがぎこちない

「なんだ……これは」

「辛いのに箸が止まりませんね」

「あはは、から〜い」

「しかもこの叉焼は市販のじゃねえだろ社」

「自家製だよ準」

「社の料理はどんどん美味しくなりますね」

「ありがとう冬馬、嬉しいから又焼を一枚進呈しよう
……欲しい？」

「ええ、貰いますよ」

そう言つて冬馬のどんぶりに余分に切つて別の皿に分けておいた又焼を二枚のせる

「なんだ！？そういう仕組みなのか？」

だったら、この又焼は日本一、いや世界一、じゃない銀河一」

「準」

「はいはい」

「不景気なツラと言われたのであげません」

「根に持つてる訳ね」

「仕方ないですね、準には私の分をあげますよ」

「しかし若のが……」

「冬馬には僕の分をあげるからいいよ、まったく準に優しすぎ」

「社のユキに接する態度と変わりませんよ」

「そうか？」

「確かに、社と若は人を引き付けると言う点では似てるかもな」

「にてるねー、とーまとやしろはにたものどおし」

「一緒かよ、不快じゃないからいいけど

ユキ、スープが頬に付いてるぞ」

「ん」

社が小雪の頬についたスープをハンカチで拭き取るためにポケットから取り出すと

小雪は目をつむって拭き終るまでじっとしていた。

「社は何だかんだで世話焼きですね」

「確かにな、社は将来いい旦那になりそだ」

「勝手なこと言うな」

社が最後に文句を言うと二人ともわかったと言って食事に戻る
それからゆっくりと時間をかけて巢奥じを終えて食器を洗い、居間のソファアに行くこと…

「午後は、何をしようか」

「無難にゲームでもするか、社もクリハンやってんだろ」

「気が向いたときだけね、確か冬馬とユキも買ったんだよね」

「私も社と同じで気が進む時だけですね」

「ぼくもやしろとおなじだよ」

「若と社はとことん似てるな……まあいいか
それじゃあ、やるか」

午後はクリハンをやって過ごす予定が

「その前に、今日の社は、なんだか不自然な動きをしているので先に整体をしましょう」

冬馬のこの一言で社にとって悲劇となる休日の午後が始まる……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8492w/>

真剣で私に恋しなさい！ It's beautiful life

2011年11月27日23時40分発行